

序に代えて

(1) み言の隠蔽、改竄を重ねる、歴史に残る『瀆神行為』

UCI (いわゆる「郭グループ」) を支持する人々が、二〇一六年秋頃から各地で集会を行って広めている金鍾奭著『統一教会の分裂』(日本語版) には、真のお母様をおとしめる『み言改竄』や恣意的な『誤訳』が散見します。

まず、韓国語版の『統一教会の分裂』では、み言を継ぎはぎすることによって『み言改竄』を行っており、その真意を歪曲させています。

さらに日本語訳では、その文章を自分たちに都合の良いように恣意的に翻訳しています。

この『統一教会の分裂』(日本語版) は340ページに及ぶ書籍ですが、その内容は読む者をして、真の父母様に対する信仰を失わせるように巧妙に仕組まれたものであることに注意しなければなりません。

記載されている内容をそのまま抽出して列挙してみると、そこに書かれている内容は、次のようになります。

統一教会の創始者(注、真のお父様)の子息のなかで、後継者に最もふさわしい人物は三男の顯進であった。彼は、自他が公認する統一教会の後継者であり(58ページ)、外貌から見ても創始者に似ており、性格も似ている。彼の登場は、統一教会が再強化される機会であった(60ページ)。学歴など、彼の能力は、父とは異なっており、天の啓示にだけ依存しない合理的かつ

理性的で、統一教会を復興させる希望を呼び起こすものだった(61ページ)。また、顯進を支える郭錠煥は、公務の処理に厳格であり、立場を与えられても清廉な生活をし、公金横領が一切なく、模範的な人格者であった(87ページ)。

一方、四男の國進は、郭錠煥を要注意人物と考え、不正を暴露しようと画策したが(85〜86ページ)、國進は嘘つきであり、創始者は彼の嘘に激怒した(90ページ)。

七男の亨進は、宗教性はあるが、自分の宗教性に頼り統一教会の伝統を歪曲することで統一教会のアイデンティティに混沌をもたらし(104ページ)。國進や亨進は後継にふさわしくない。にもかかわらず、彼らは顯進に代わって統一教会の後継の座に登場するようになる。その過程には、「パークワン事業に対する文國進の偽りの報告」があり(91ページ)、創始者を巻き込んだ訴訟まで起こした。これらの出来事は、顯進を追いつつ落としたための陰謀であった(95〜97ページ)。

その陰謀の背景に、「文顯進を危機として感じていた」(60ページ)第一世代(注、金孝律氏・他)の抵抗があり(80ページ)、かつ顯進の血統問題について言及し、創始者に影響を及ぼした韓鶴子がいた(116ページ)。文仁進の米國総会長の就任、二〇〇九年三月の東草事件も陰謀によるものであった(120、152ページ)。(注、これを簡潔に表現すると「真のお母様陰謀論」ということになる)その策略により、三男の顯進は数々の陰謀にはめられ、後継の座から追い落とされた。

陰謀が渦巻くなか、後継者を誰にするかについて、創始者の態度はハッキリしなかった(69〜70ページ)。この創始者の態度が、統一教会に混乱を招くことになった。また、韓鶴子は創始者の血統を疑っており(110、308ページ)、創始者に対して「不従順」であった(245〜253ページ)。創始者

(2) お父様の「後継の秩序」は明確である

『統一教会の分裂』は、「後継者を誰にするかについて、創始者の態度はハッキリしなかった」(69～70ページ)と述べていますが、それは事実とは違っており、真のお父様の後継に関する秩序は明確なものでした。

二〇〇〇年三月十日、真のお父様は八十歳のときの名言で「**先生が霊界に行くようになればお母様が責任を持つのです。その次には息子・娘です。息子がしなければなりません。息子がいなければ、娘がしなければなりません。後継する者が誰だということ**は既に伝統的に全て(準備が)なされています」(マルスム選集318～260)と語っておられます。

まず、「先生が霊界に行くようになれば**お母様が責任を持つ**」ということであり、次に「**息子・娘**」ということです。そして、注目すべき点は「息子がいなければ、娘がしなければなりません」と語っておられる点です。このように、真のお父様は、「後継の秩序」を明確にしておられるのです。

また、真のお父様は七十歳の古希のとき、「私(注、お父様)がいなくても、**お母様の前に一番近い息子・娘が第三の教主になるのです**」(同、202～83～84)と明言され、さらに「**先生が一人でも真の父母様の代身であり、お母様が一人、いても真の父母様の代身です。『レバレンド・ムーンが古希を過ぎて七十を超えたので後継者が現れないのか?』そんな言葉はやめなさい。…先生が第一教主、その次に、お母様は第二教主、主だということ**です」(同、201～126)と語っておられます。

このように七十歳や八十歳の節目のときに明確に後継の秩序を述べておられるというのが真相です。そして、九十歳のとき

はそのことに苦心していたというのが真相である。

創始者が他界した統一教会は危機を迎えている。創始者のアイデンティティが韓鶴子のアイデンティティによって否定されているためである(318ページ)。韓鶴子の他界後には多くの議論が予想される(319ページ)。(注、この書はお母様が亡くなられた後のことまで見据えて論じている)しかし、創始者のアイデンティティを維持しながら、それを創意的に拡大しデザインしようとしている顕進によって、統一教会人を再活性化することができるようになるであろう(323ページ)。

以上が『統一教会の分裂』の概要です。

この本の問題点は、著者の金鍾奭氏が主張したい「真のお母様陰謀論」を何とか裏づけようとして、引用した**み言の要所**、要所で**隠蔽**や改竄をしていることです。そのために、内容が全般にわたって真の父母様の実態や真のお父様のみ言と食い違っています。

この書籍の性格を一言で表現するならば、真の父母様を不信させようとする意図に満ちた「虚偽のストーリー」満載の本と言えます。

また、「韓鶴子の不従順」(245ページ)という項目では、真のお父様のみ言を十八個も引用していますが、マルスム選集の原典に当たってそれらを検証すると、その全てにおいて改竄がなされているのです。

それぞれの項目を挙げて詳細に後述しますが、この改竄行為は、真の父母様をおとしめるものであり、多くの人々の判断をも誤らせてしまうものです。その意味では「**瀆神行為**」であると言わざるをえません。

に真のお母様との「最終一体」を宣言しておられます。

ところで、二〇〇〇年三月三十一日、顕進様が世界大学連合理究研究会の世界会長に就任しましたが、その頃から、その関係者が顕進様を真のお父様よりも前面に押し立てて報告するようになっていきました。それを受けて、お父様は同年五月三十一日、顕進様に対し「警告」のみ言を語っておられます。

「父の伝統に従って、母の伝統に従って、**三番目に息子である。それを知っているの? ……母の伝統を立てる前に息子の伝統を立てることができないことを知っているの?**」(マルスム選集323～83)

このように語られ、まず父、そして母、息子は三番目である、と念を押された上で、「顕進は私が前に立たせているのです。立たせることで、先生より前面に押し立てて報告するということです。分かりますか。何のことか? 統一教会から党派をつくる輩(分派)になります。…恐ろしく、とんでもないことです。ですから、転換時代に精神を引き締めなければなりません」(同、323～91～92)と語っておられます。

さらに、真のお父様は、世界平和統一家庭連合時代とは何かについて、「**長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければなら**ないのです。服従するようになれば父と連結します」(『主要儀式と宣布式Ⅲ』151ページ)と語られ、母を通じて父に連結するように指導しておられます。したがって「後継の秩序」に関して、お父様の態度が曖昧であったという金鍾奭氏の記述は虚偽の主張です。

(3) 『統一教会の分裂』の内容は、**反対牧師らの言説と酷似**

ところで、『統一教会の分裂』を読んで懸念することは、そ

こに書かれた内容が、いわゆる反対派の、「**真の父母**」を不信させようとする**統一教会批判と驚くほど酷似**しているという点です。

日本家庭連合(旧・統一教会)は長年にわたり、信者に対する拉致監禁を伴った強制的脱会説得事件の被害に遭ってきました。その際、反対牧師、反対弁護士、ジャーナリストらがその背後にあって父兄たちを教唆するなどし、脱会説得に関わってきました。一九九三年三月六日の山崎浩子さん失踪事件の背後には、有田芳生氏や石井謙一郎氏らジャーナリストによる山崎さん入信スクープがあり、強制的な脱会説得事件の一翼を担った立場で報道がなされました(参考、太田朝久・三笠義雄共著『有田芳生の偏向報道まっしぐら』賢仁舎)。

『統一教会の分裂』に書かれている「ストーリー」は、反対派の一翼を担う報道をした石井謙一郎氏による「統一教会批判」の内容に極めて酷似しており、石井氏の批判記事をわざわざ135ページで紹介しています。

有田芳生氏も、この石井氏の批判記事に寄稿をしており、「日本の幹部の中には、三男の顕進氏についていきたいという動きがあるんです。(顕進氏は)もともと人望が高かった」と述べて、思い切り顕進様を持ち上げています。

これらの事実を踏まえて感じるののは、拉致監禁による強制脱会の道が困難になった反対派が、家庭連合と別行動を取っているUCIに擦り寄り、今やその背後から世界平和統一家庭連合を潰そうと画策している可能性が高いのではないかということです。

一九九三年三月の山崎浩子さん失踪事件に前後し、反対派は「統一教会潰し」を画策してさまざまな統一教会批判を展開しました。山崎浩子さんを脱会説得した一人である浅見定雄氏は、

その著書で、真のお父様に兄や姉妹がいることを根拠に、お父様は「無原罪」ではありえないと批判して教会員を脱会説得していました。

ところで、^{ヒヨンゼン}顯進様は、後述するように二〇〇九年九月以降、真のお父様の前に姿を見せなくなり、たもとを分かちました。それから七年が過ぎ、『統一教会の分裂』が出版され、UCI側はそれを広めました。この書籍の内容は、「真のお母様陰謀論」を描いており、特に「韓鶴子^{ハクチャ}は創始者の血統を疑っている」という点に中心テーマを置いています。

その『統一教会の分裂』が広く行き渡った二〇一六年暮れ、UCI側の人物によって、まるで真のお母様がお父様の血統を疑ってでもいるかのような情報が流され世界を駆け巡りました。偶然にしては、出来過ぎ、という思いを持たざるをえません。

この点について、真のお母様は五十七周年「聖婚記念式」の場で、「原罪なく生まれた独り子、独り娘が、天の願いに従って小羊の婚宴を挙げた日です」(『世界家庭』二〇一七年五月号、6ページ)と、真のお父様もお母様も共に無原罪で生まれたことを語っておられます。

(4) UCI (いわゆる「郭グループ」) 問題の経緯

一九九八年七月十九日、顯進様が「世界平和統一家庭連合」の世界副会長に就任したことで、信徒の中には、顯進様が真のお父様の「後継者」であると考える人もいました。しかしながら、家庭連合の教えは、「真の父母というのは一組しかないのです」(八大教材・教本『天聖經』2400ページ)というように、人類の真の父母は「永遠に一組」であり、人類の真の父母に後継者は存在しません。キリスト教が二千年間イエス様

と聖霊を中心に歩んだように、天一国も、文鮮明・韓鶴子ご夫妻が、永遠に唯一なる人類の真の父母であられるのであり、そういう意味で「真の父母」に後継者は存在しないのです。

ところで、二〇〇八年四月十八日、^{ヒヨンゼン}亨進様が家庭連合の世界会長に就任した頃から、顯進様は真の父母様の指導や指示に従わず、別の動きをすることが顕在化するようになりました。二〇〇九年三月八日、韓国・東草^{ソクチャ}で、真のお父様は顯進様に対し「全ての公職から退き、父母と共に生活しながら『原理』を学ぶように」、「GPFから一年間、休むように」と指示されましたが、顯進様は従わず、同年九月十日を最後に、真の父母様の前に姿を見せなくなったのです。また、郭錠煥氏^{クァクチョンフワン}も同年十二月六日を最後に、真の父母様の前に姿を見せなくなりました。

二〇一〇年二月、顯進様はGPF大会を開催し、それに対して真のお父様は再度、「GPF大会をしてはならない」と指示されましたが、その後も大会を強行しました。

顯進様は、同年四月二十七日、家庭連合およびその関連団体の資産を管理するUCI (国際統一教会、Unification Church International) の理事会を乗っ取り、真の父母様の指導や許可を得ずに公的資産を売却し、定款も改定し、「国際統一教会、Unification Church International」の名称を単に「UCI」に変えて統一教会および真の父母様との関係を断絶させ、それを運営するようになりました。

そうした状況の中、二〇一一年五月二十五日、真の父母様は「真の父母様宣布文」を発表され、その中で、顯進様をはじめUCI理事陣(顯進様を中心とするグループ)に対し「即刻現職から退くこと。許諾なく公的資産を処分して得た全財産を返還せよ」と指示されたのでした。しかし、顯進様はその指示を完全に無視し、別行動を続けています。

なお、顯進様らが活動に用いている財源であった家庭連合およびその関連団体の資産について、米国の裁判所が二〇一六年十二月二十三日、「GPFおよびその他の世界平和統一家庭連合と無関係のいかなる存在・組織へのどんな種類のどんな寄附をも禁じる」との仮差し止め命令を下し、UCI側の資産処分に歯止めをかけています。

『統一教会の分裂』は、「(顯進は) 創始者のアイデンティティを維持しながら、創意的に拡大しデザインしようとしている」(323ページ)と持ち上げて述べていますが、映像『UCIを支持する人々の言説の誤り・No.1』(https://trueparents.jp/?page_id=3778)で説明しているように、顯進様の説くアイデンティティは、真のお父様の語られるアイデンティティとことごとく食い違ったものになっています。

そのような中、故・神山^{タケ}威氏が顯進様に従おうとしたときには、真のお父様は神山氏を呼ばれ、二〇一〇年七月十六日のいわゆる「ポート会議」で次のように語られました。

「(顯進は) もう、ずっと前に離れたんだよ、十年前に」、「顯進は先生と同じ方向に向いていない。逃げ回っている。顯進が先生の方向に来なければならんだよ」、「なぜ先生に質問しないで顯進の方に行くのか」、「顯進は先生と同等の立場を取っている。他の子は先生を重要視している」と語られました。

顯進様のアイデンティティがことごとく真のお父様の^{しんは}み言と食い違っている事実を考えたとき、お父様が「(顯進は) 逃げ回っている」と残念そうに語られたように、お父様は何となくして、み言と食い違ったアイデンティティを主張している顯進様を教育しようとしておられたに違いありません。

事実、二〇〇九年三月八日、韓国・東草で、お父様は顯進様に対して「顯進、おまえも別の所に行かず、父の所に来て、父

に付いて回りなさい」(マルスム選集609-133)と直接、命じておられます。そして、特別に顯進様に、「真の父母様についての学習をしなさい、カイン・アベルの関係を勉強しなさい」と指示されました。

しかし、その真のお父様の指導にも従わず、前述のように、同年九月以降、真の父母様の前に姿を見せなくなってしまったのです。そして、今やお父様のアイデンティティと異なることを平然と述べる「統一教会の党派(分派)」になってしまったことに対して、深く心を痛めざるをえません。

二〇一七年暮れ、顯進様は「家庭平和協会(FPA)」という組織を立ち上げ、「FPAは、創始者が世界平和統一家庭連合を通して実現しようとしていたものを目標としている」(『統一教会の分裂』314ページ)と平然と述べるなどし、非原理的言動をさらに強めています。

以上の経緯を踏まえて考えてみると、事の真相は『統一教会の分裂』が述べているような「真のお母様陰謀論」によって顯進様が追い出されたというのではなく、顯進様自身が真のお父様のみ言と食い違う主張をし、お父様の願いに従わずに別行動を取り続けたということです。その結果が、今のよう状況招いていると言わざるをえません。

(5) 『統一教会の分裂』の最大の問題点

『統一教会の分裂』の最大の問題点は、真のお父様ご自身の「認識」を無視して記述している点です。

『統一教会の分裂』では、「韓鶴子はお父様の血統を疑っており、お父様に不従順であった。その韓鶴子の不従順に対し、お父様は苦心しておられたのが真相だった」などとして、お父様

と真のお母様は一体化できていないと述べています。しかしこれは、お父様ご自身の認識とは完全に異なっています。

真のお父様ご自身の認識とは次のようなものです。

二〇一〇年六月十九日と同年六月二十六日、米国・ラスベガスで『最終一体』を宣言しておられ、その後、世界を巡回しながら「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会」を挙行していきました。そして二〇一二年の年頭標語で「天地人真の父母勝利解放完成時代」を発表され、同年三月には日本で「天地人真の父母様勝利解放完成時代宣布大会」を開催されたうえで、第五十三回「真の父母の日」に、『天地人真の父母定着……さえ成れば、全てが終わる』と語られました。

そして、同年四月十四日、米国・ラスベガスの天和宮で「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会を最終完成・完結する」と宣布され、その七日後の四月二十一日、韓国の清心平和ワールドセンターで「天地人真の父母様特別集会」を開催されました。その大会で、真のお父様は「天地人真の父母定着完了」という講演文を発表され、「栄光の宝座に座る人は、億千万代に続いてただ一つの夫婦（文鮮明・韓鶴子ご夫妻）であって……万王の王はお一方です」と明確に発表しておられます。これは、「真の父母」の完全勝利の宣言と言いうるものです。

『統一教会の分裂』の最大の問題点は、これら一連の真のお父様ご自身の認識を完全に無視して論じている点です。

以下、項目ごとに『統一教会の分裂』の虚偽について詳述していきます。

★本文中の真の父母様のみ言や『原理講論』は「網掛け」で、UCIおよび反対派の主張は「楷書体」で区別しています。

教理研究院

真の父母様宣布文サイトも
ご確認ください。



目次

序に代えて／1

- (1) み言の隠蔽、改竄を重ねる、歴史に残る『瀆神行為』／1
- (2) お父様の『後継の秩序』は明確である／2
- (3) 『統一教会の分裂』の内容は、反対牧師らの言説と酷似／3
- (4) UCI（いわゆる「郭グループ」）問題の経緯／4
- (5) 『統一教会の分裂』の最大の問題点／5

一、引用元の存在しない、捏造された引用文／8

二、「真の父母様宣布文」の真実／14

- (1) 最初の「宣布文」の真実／15
- (2) 「宣布文」は、顯進様を「除去するために作成された作品」ではない／17
- (3) 亨進様が、「自身が創始者の『代身者・相続者』」と主張する根拠の誤り／19

三、いわゆる「文仁進様の米国総会長任命事件」の真相／21

- (1) 「創始者の意思とは無関係に文仁進を米国総会長として発令した」と捏造／21
- (2) 「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪し、代わりに文仁進を米国総会長に発令」したと歪曲／23
- (3) 亨進様は「文顯進に米国総会長職の発令をしなかった」という虚構／24

四、文顯進様による「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」の真相／27

- (1) 金炳和氏の虚偽に基づく声明文／28
- (2) 虚偽の証言でつづられた『統一教会の分裂』／29
- (3) 櫻井正上氏は金炳和氏の虚偽証言にだまされている／30

五、「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」と改竄／34

- (1) 真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」との虚偽の記述／34
- (2) 「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」と改竄／38
- (3) 「韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」と改竄／38

六、サタンは真の子女様を狙っている

—— 真のお父様の預言／40

- (1) 「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言は存在しない／40
- (2) 『統一教会の分裂』が隠蔽しているみ言／42

七、存在しない「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言

—— 偽りに満ちたみ言引用／47

- (1) 二〇〇二年一月二十三日のみ言の偽った解釈／47
- (2) 二〇〇四年一月二十六日のみ言の虚偽の解釈／50
- (3) 二〇〇四年八月三十一日のみ言——あきれる恣意的解釈／53
- (4) 二〇〇四年十二月四日のみ言——直後の部分の隠蔽／54
- (5) 二〇〇五年二月二十日のみ言の隠蔽／55
- (6) 二〇〇五年二月二十一日のみ言の主語を書き加えて改竄／57
- (7) 二〇〇五年三月二日のみ言——主語の削除／58
- (8) 二〇〇五年二月二十五日のみ言——郭錠煥氏への叱責の部分を隠蔽／60
- (9) 二〇〇五年七月三日のみ言——勝利された真のお母様である事実を隠蔽／62
- (10) 二〇〇九年二月二十七日のみ言——引用したみ言の一部の意味を改竄／65

一、引用元の存在しない、捏造された引用文

金鍾奭氏は『統一教会の分裂』の「序文」で、この書が「統一教会創始者の他界を前後した統一教会の分裂の状況を追跡した話」であり、「宗教学研究の内容」であると述べています。彼はこの書が、まるで宗教学的に研究した学術書であるかのよう

に述べているのです。しかし、真のお父様のみ言を引用する際に、彼はそれらを改竄と隠蔽を重ねて捏造しており、ひいき目で見ても宗教学の学術書などと呼べるようなものではありません。

さて、金鍾奭氏は、『統一教会の分裂』の中で、真のお父様が二〇〇〇年十一月十一日に「母子協助時代が終わって父子協助時代が到来したので、母は必要なく、父と息子が一つにならなければならぬ」（70ページ）と語られたとし、その後、二〇〇六年十月六日には「文顯進と一つになって真の父母に従え」（108ページ）と指示され、さらには二〇〇八年十二月二十四日に「文顯進を中心の一つになれ」（139ページ）と命じられたと述べています。

そして、「後継者を誰にするかについて、創始者の態度はハッキリしなかった」（69～70ページ）と主張しているのです。

それでは、以下に金鍾奭氏が採り上げたみ言を検証し、記述内容の虚偽性を暴いていきます。

①二〇〇〇年十一月十一日「父子協助時代が到来したので、母は必要なく、父と息子が一つにならなければならない」というみ言は存在しない

この部分は、『主要儀式と宣布式Ⅳ』（日本語訳）に収録された十三ページにもわたる膨大なみ言を継ぎはぎして、わずか六行に要約し、なおかつ意味を改竄しているのです。（注、詳しくは「真の父母様宣布文サイト」を参照のこと。https://trueparents.jp/?page_id=3603）

すなわち、『主要儀式と宣布式Ⅳ』で、真のお父様は「母子協助時代を退けて、父子協助時代へと越えていくために、母親はここに協助しなくても、絶対信仰・絶対愛・絶対服従していくことによって蕩滅するために……」（603ページ）と語っておられるのですが、金鍾奭氏はそれを、「母子協助時代が終わって父子協助時代が到来したので、母は必要なく、父と息子が一つにならなければならない」と述べたと改竄しているのです。これは彼の「創作文」にすぎません。

父子摂理（父子協助）時代について、真のお父様は次のように語っておられます。

「先生を中心とした子女たちが生まれたために、父と息子、父子摂理時代になるのです。母子摂理時代ではなく父子摂理時代なのです。真の父母が出てくる前までは、母親たちは息子たちを育てながら迫害を受けてきましたが、神様を中心として、直接、真の父母を中心として、息子と娘が生まれたために、これからは母親がいなくてもかまいません。母の時代は過ぎ去り、父子摂理時代へと越えていくのです。」

それゆえ、神様を中心として真の父が現れ、真の父を中心として真の母が現れ、そこから生まれた息子と娘たちには、サタンは手をつけれないのです」（『主要儀式と宣布式Ⅳ』598～599ページ）

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「文顯進を先頭に立てて創始者（注、お父様）の権限を伝授する過程」（69ページ）として、次のように述べています。

真のお父様は、顯進様を「一九九八年七月、世界平和統一家庭連合世界副会長……二〇〇〇年三月三十一日に統一教会が主導する大学生組織カープ（CARP）の世界会長」（68ページ）に任命し「将来の統一教会後継者としての立地」（68ページ）を強固なものとされた。

しかし、「文顯進を先頭に立てて創始者の権限を伝授する過程」において、「創始者が示した態度が不明確」（69ページ）であった。真のお父様は「二〇〇〇年三月に韓鶴子（後継者）（69ページ）であると語られながらも、「二〇〇〇年十一月には『母子協助時代が終わって父子協助時代が到来したので、母は必要なく、父と息子が一つにならなければならない』（70ページ）とも語られ、後継に対する「態度が不明確」であった。

しかしながら、金鍾奭氏の以上の内容は事実に反しています。真のお父様は前述したように二〇〇〇年三月十日、「先生が靈界に行くようになればお母様が責任を持つのです。その次には息子・娘」であると語っておられ、後継の秩序は明確です。金鍾奭氏は同年十一月十一日、真のお父様が「母子協助時代が終わって父子協助時代が到来したので、母は必要なく、父と息子が一つにならなければならない」と語られたとし、その根拠が『み言葉選集』456巻465頁（70ページ）であると記述しています。

しかし、『マルスム選集』456巻は316ページの本であり、金鍾奭氏は出典を偽っているのです。

すなわち、母子摂理時代とは「真の父母が出てくる前まで」のことを言い、この時代は「母親たちは息子たちを育てながら迫害を受けて」きたというのです。しかし、父子摂理時代は「真の父母を中心として、息子と娘が生まれた」ことで始まり、母子摂理時代で迫害を受けてきた「母親がいなくても」よく、そのような「母の時代」は過ぎ去ると語っておられるのです。したがって、父子摂理（父子協助）時代とは「母が必要ない」時代、すなわち真の母が必要ない時代ではなく、母子摂理時代において「母親たちは息子たちを育てながら迫害」を受けてきた、そのような「母親たちは必要ない」時代なのです。「真の父を中心として真の母が現れ、そこから生まれた息子と娘たちには、サタンは手をつけれない」時代であるので、真の母が絶対に必要な時代となったのです。

以上、金鍾奭氏は、真のお父様の後継に対する「態度が不明確」であるかのようなストーリーを描いて読者を誘導するために、「父子協助時代が到来したので、母は必要なく、父と息子が一つにならなければならない」と、み言を改竄し、出典の表記まで偽っているのです。

②二〇〇六年十月六日「文顯進と一つになって真の父母に従え」というみ言は存在しない

金鍾奭氏は『統一教会の分裂』で、「カリスマ伝授の失敗…文顯進追放過程」（107ページ）というストーリーを描くために、以下のように記述しています。

真のお父様は、顯進様を「将来の統一教会後継者」（68ページ）として立てるために「文顯進を先頭に立てて創始者の権限

を伝授」(69ページ)しようとした。二〇〇六年から顯進様^{ヒョジン}はUPF世界巡回講演を行った。二〇〇六年四月一日、お父様は、顯進様を「UCIの理事長に就任させ」(89ページ)た。二〇〇六年初め頃から、ヨイド聖地開発における騒動が生じ始めたが、これは「弟の文國進^{ムンクンジン}が兄の文顯進の公的責任を妨害する為に起こした」(90ページ)ものだった。同年四月二十三日、お父様は「家族会議」(90ページ)を開き、そこで「文國進は韓国維持財団の業務から直ちに手を引き、UCI理事として文顯進理事長の下で仕事する」(90ページの脚注)ように指示された。しかし、「家族会議で決まった詳細事項は守られ」(同)ずに、真のお母様は「創始者の決定と違って文國進が財団理事長の座を維持するように」(同)した。それでも、お父様は同年十月六日、「文顯進と一つになって真の父母に従え」(108ページ)と言及された。そして二〇〇七年七月、顯進様は「UPF共同議長に正式に就任」(109ページの脚注)し、「UPFに対する責任までも任せられた」(109ページ)。実際には「統一教会の全ての組織を文顯進が掌握するようになった」(同)のである。だからこそ祝福家庭は「文顯進と一つになって真の父母に従えと言及」(108ページ)され、それこそがお父様の願いであった。しかし、そのお父様の願いに反して、お母様と「文亨進^{ムンヘンジン}、文國進^{ムンクンジン}が共謀して文顯進を追放」(239ページ)したのであった。

しかしながら、これらは事実^{キムデギ}に反した、完全なる虚偽のストーリー^{キムデギ}です。金鍾奭氏^{キムデギ}は、二〇〇六年十月六日、真のお父様が「文顯進と一つになって真の父母に従え」と言及したとするみ言^{ミゴト}を次のように引用します。

の統一教会後継者」として望んでおられたにもかかわらず、それを阻止するために、真のお母様と「文亨進、文國進が共謀して文顯進を追放」した、というストーリーを描くためにそうしたと言えます。

実際の真のお父様のご意向は、二〇〇五年一月七日、「外的に息子娘に任せるのです。アジア地域は國進であり、西洋地域は顯進であり、その次に宗教圏は末子(亨進)です」(マルスム選集482-21)と語っておられるように、「統一教会の全ての組織を文顯進が掌握する」ことではなく、子女に責任を分担させ、真の父母様のみ旨を中心に子女たちが一体化して歩むことを願っておられたのです。

以上のように、二〇〇六年十月六日、真のお父様が「文顯進と一つになって真の父母に従え」と言及された事実はなく、これも金鍾奭氏の創作文です。

彼がこのように偽るのは、後述するように、お父様に対する「韓鶴子^{ハンハク}の不従順」(245ページ)を何とか描こうと、「韓鶴子と文亨進、文國進が共謀して文顯進を追放」(239ページ)したかのようにでっち上げるためなのです。

③二〇〇八年十二月二十四日「文顯進を中心に一つになれ」のみ言も存在しない

『統一教会の分裂』で金鍾奭氏は、二〇〇八年十二月二十四日、真のお父様が亨進様に「『文顯進を中心に一つになれ』と指示」(139ページ)されたと述べていますが、そこにはみ言の典拠が表記されていません。二〇〇八年十二月二十四日に語られたみ言は、マルスム選集604巻198-213ページに「新しい聖殿と祖国光復」という題目で収録されていますが、お父

「地上ではこれから顯進を中心として一つにならなければならないのです。それゆえに皆さんは文顯進家庭を中心として一つになり、父母様に従って入っていくのです。そうしてこそ全てが終わるのです」(『統一教会の分裂』108ページ)

『統一教会の分裂』はこのみ言を『み言葉選集』335巻285ページ、2006・10・06(108ページの脚注)からの引用であるとします。しかし、この二〇〇六年十月六日のみ言は、335巻285ページには掲載されていません。

『マルスム選集』335巻285ページを見ると、これは二〇〇〇年十月六日に語られたみ言であり、金鍾奭氏が「母子協助時代が終わって父子協助時代が到来した」と真のお父様が述べられたとするより以前のものです。それを彼は二〇〇六年十月六日に語られたみ言であると、六年も偽っています。

このようにお父様が二〇〇六年に「文顯進と一つになって真の父母に従え」と言及されたとするみ言は存在せず、これは虚偽の引用にほかなりません。

ちなみに、二〇〇〇年十月六日のみ言は、顯進様が「二〇〇〇年三月三十一日に統一教会が主導する大学生組織カープ(CARP)の世界会長」(68ページ)に就任された年のものであり、その意味は真の父母様が立てた責任者(カープ世界会長の文顯進様)に従い、真の父母様のみ旨を果たすよう指導者や教会員を教育したものです。引用されているような「将来の統一教会後継者」は顯進様なので、「文顯進と一つになって真の父母に従え」と語られたものではありません。

金鍾奭氏が、二〇〇六年のみ言であるかのように年数を改竄^{カクセン}するのは、祝福家庭が「文顯進と一つになって真の父母に従(う)」ことが真のお父様の願いであったとし、顯進様を「将来様が「文顯進を中心に一つになれ」と亨進様に対して指示されたみ言はありません。

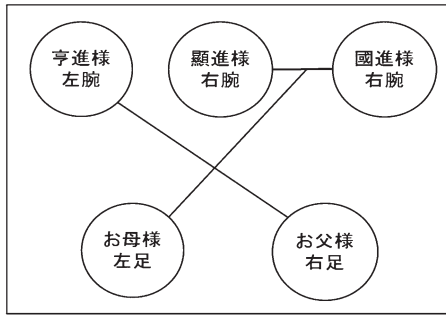
また、『統一教会の分裂』はこのクリスマスイブの晩餐会のとき、真のお父様が「文顯進中心の兄弟間の秩序と摂理の進路を明確にした」(135ページ)と述べています。その根拠として『統一教会の分裂』135ページの脚注349番で、次のように「週刊文春」48ページの記事を引用しています。

「349) 日本のジャーナリスト石田謙一郎は二〇〇八年十二月二十四日、文顯進を中心とした組織改編を示唆する創始者の言及……を以下のように伝えている。……『これからすべての摂理は、長兄である顯進氏^{ヒョジン}が中心になっていく』

金鍾奭氏は、この引用が「週刊文春」の記者「石田謙一郎」の記事からとし、それを脚注に引用しますが、「石田」という名も虚偽の表記で、正しくは石井謙一郎氏です。

二〇一一年当時、家庭連合は「週刊文春」記事に対し、事実^{キムデギ}に反する記述が多くあったため、出版元の文藝春秋社と石井謙一郎氏に対し、訂正と謝罪を求める「抗議文」を送り、「週刊文春」捏造・歪曲^{キョウキョク}報道を糾弾する「ための抗議行動も行いました。【下の写真参照】





2008年12月24日、天正宮博物館

真のお父様は、亨進様はお父様と対称に、顯進様と國進様はお母様を中心に対称になっていると語っておられます。それは、歩くときの足と腕の関係のように、右足のお父様と左腕の亨進様とが歩調を合わせ、左足のお母様と右腕の顯進様・國進様とが歩調を合わせて、新しい目的地を探すために、入れ替わらなければならぬと語られ、亨進様をお父様から向かって左側に立たせました。そのように兄弟間の秩序を明確にしておられます。【写真と図を参照】

この秩序は、二〇〇八年四月六日、第四十九回「真の父母の日」に、ハワイにおいて「真の母およびカイン・アベル一体化の特別式」を挙行されたときの立ち位置と同じです。すなわち真のお母様を真ん中に顯進様、國進様を両脇に立てられ、互いに手をつなぐように指示されました。【下の写真参照】

真のお父様はそのハワイの式典で、次のように語られました。「あなたたちカインとアベルが、お母様の言葉に絶対服従しなければなりません。……あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。それが父母を

石井謙一郎氏は、有田芳生氏らと共に統一教会に対する反対活動をしてきたジャーナリストです。彼らは一九九三年三月六日に起こった山崎浩子さん失踪事件および「脱会」に関連して注目されたジャーナリストであり、山崎さんの強制的な脱会説得事件の一翼を担った立場において報道をした人物です（参考、太田朝久・三笥義雄共著『有田芳生の偏向報道まっしぐら』賢仁舎刊）。

『統一教会の分裂』で金鍾奭氏は、その反対派の人物を、「石田」と名前を変えて掲載しており、これは反対派ジャーナリストと分らないようにするための隠蔽行為です。

もっと驚くべきは、『統一教会の分裂』の原本の韓国語版の脚注では、この「週刊文春」二〇一一年九月八日号の引用文が全て削除されています。

韓国語版の原本と、日本語版の『統一教会の分裂』とは、脚注の番号がずれており、日本語版の最後の脚注番号が729であるのに対し、韓国語の原本は726になっています。原本と翻訳本の脚注が食い違う書籍は、めったにお目にかかれないものです。

引用元である二〇一一年九月八日号の『週刊文春』の記事を読むと、この情報源は「韓国の統一教会関係者」（48ページ）と書かれており、おそらくはUCIの関係者であると思われるます。だとすれば、これこそ「虚偽の情報」を提供した、事実の隠蔽であると考えられるでしょう。

結局、二〇〇八年十二月二十四日に真のお父様が亨進様に対し「文顯進を中心になれ」（139ページ）と語られたという根拠は、反対派ジャーナリストの石井謙一郎氏の記事であり、お父様のみ言ではなく、み言の根拠もありません。

『統一教会の分裂』の135ページでは、二〇〇八年のクリ

スマスイブの晩餐会で、真のお父様は「文顯進中心の兄弟間の秩序と摂理の進路を明確にしたという。特に新しい聖殿と祖国光復の意義を強調し、文顯進を中心に左右に文國進と文亨進を立てて、天福宮建設基金20億ウォンを文顯進—文國進—文亨進の順に下賜しながら、創始者が持っている全てを相続し、世界万民と後世に創始者を代身して分け与えることができる伝統を守る先祖になるよう促した」と述べたとあります。しかし、マルスム選集を見ると、お父様は天福宮建設基金を下賜されながら、次のように語っておられます。

「兄を中心として（天福宮建設基金を）与えるのです。顯進が真ん中に立ちなさい。國進は左側に立ちなさい。亨進はあなたが全体（新しい聖殿）に責任を持つので右側に立ちなさい」（マルスム選集604-2000-2001. 2008・12・24）

このように、真のお父様は亨進様に対し、新しい聖殿建設について「あなたが全体に責任を持つ」と語られ、「天福宮建設基金」を下賜されたのです。さらに、「新しい聖殿と祖国光復」に対する摂理の進路と兄弟間の秩序については、次のように語っておられます。

「神様を中心に、その次にアダムを中心に亨進です。亨進は右側に立ちましたが、先生と対称になっており、あなたたち（顯進・國進）はお母様を中心に、対称になっていますが、歩く時はどうでしょうか？ 左足は右腕に合わせ、右足は左腕に合わせるのです。このように歩くのと同じように生きられる新しい目的地を探すためには、このように入れ替わらなければならないのです。新しい聖殿と新しい祖国光復です。祖国光復を成すにおいて聖殿を中心に成すのです」（マルスム選集604-2002）

殺した元凶です。ですから、われ知らず憎みます。声を聞くのも嫌で、歩いていくのを見れば、後からついていって殺したい思いが出てきます。あなたたちに、われ知らずそのような思いが出てくるということです」（『ファミリー』2008年6月号、30ページ）

このハワイの式典で、真のお父様が語っておられるように、真のお母様の言葉に、子女（カイン・アベル）である顯進様と國進様が絶対服従して一体化していくべきなのです。

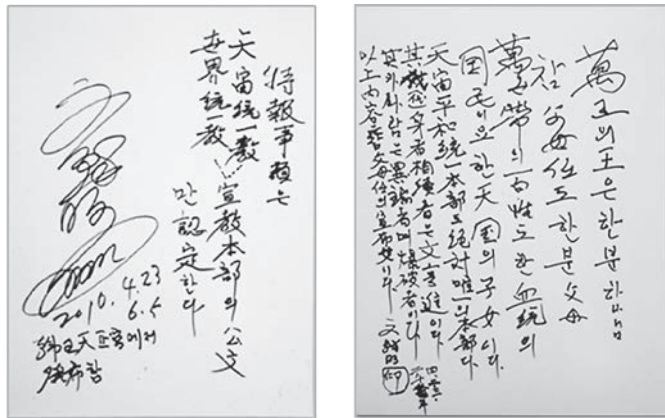
二〇〇八年十二月二十四日の晩餐会の写真だけを見ると、まるで「文顯進中心の兄弟間の秩序と摂理の進路を明確にした」ものと勘違いしてしまいます。しかし、お父様は、「亨進はあなたが全体に責任を持つ」と語っておられ、さらには「亨進は右側に立ちましたが、先生と対称になっており、あなたたち（顯進・國進）はお母様を中心に対称になっています」とも語っておられ、「真の母」を中心として子女（カイン・アベル）である顯進様と國進様が、真のお母様に絶対服従して一体化していくことが、神様の摂理を進めていくための最大のポイントであったことが分かります。



「真の母およびカイン・アベル一体化の特別式」（2008年4月6日、米国・ハワイ）

結局、今日における子女様の問題の原因は、真のお父様の願いに従って顯進様と國進様とが真のお母様の言葉に絶対服従することであったにもかかわらず、そのようにできなかったところにあったと言わざるをえません。

二〇〇八年十二月二十四日、



最初の「宣布文」が記された色紙の表面（右）と裏面（左）

『統一教会の分裂』173ページで、最初の「宣布文」を次のように引用します。

①「宣布文」の真実

（注、「真の父母様宣布文」は、二度発表（二〇一〇年六月五日と二〇一一年五月二十五日）されており、真の父母様宣布文サイトに掲載したものは、二度目のものです。）

真のお父様は「統一教会において長子は誰ですか。……孝進より先生の息子、娘」（マルスム選集133-244）と語っておられ、孝進様がカープ世界会長の際に、お父様は「中心的長子」（『祝福』一九八五年冬季号、37ページ）の責任を果たすよう願っておられました。同様に、その当時、亨進様に対して「中心的長子」の責任を果たすよう願っておられたのです。

したがって、『統一教会の分裂』にあるように、二〇〇八年十二月二十四日、真のお父様が「世界会長である文亨進に二〇〇八年十二月二十四日、『文顯進を中心につになれ』と指示」された事実はなく、これは家庭連合に対する反対派ジャーナリストの石井謙一郎氏が書いた「捏造・歪曲」記事からの引用であり、「韓国の統一教会関係者」が提供した「虚偽」の情報なのです。

以上、『統一教会の分裂』は、み言の改竄が散見し、事実に対する虚偽のストーリーでつづられているのです。

引用したという真のお父様のみ言の原典に当たってみると、ことごとくみ言を改竄している事実が浮き彫りになります。

UCI（いわゆる「郭グループ」）側を支持する人々は、この金鍾奭著『統一教会の分裂』の虚偽のストーリーを「事実」と述べて、「真実」であるかのように思い込んでおり、二〇一六年の秋頃から日本で集会を行いながらそれを広めています。

二〇一〇年七月十六日に、真のお父様は故・神山威氏に対し

「万王の王は一人の神様、真の父母様も一人の父母、万世代の民も一つの血統の国民であり、一つの天国の子女である。天宙平和統一本部も絶対唯一の本部である。その代身者・相続者は文亨進である。それ以外の人は異端者であり爆破者である。以上の内容は、真の父母様の宣布文である。二〇一〇年六月五日 文鮮明」

『統一教会の分裂』

て「彼ら（UCI、いわゆる「郭グループ」の人々）のことが、一つ聞いて、二つ聞いて、三つ聞いたら、みんなうそばかり」であると語っておられます。

二、「真の父母様宣布文」の真実

二〇〇八年四月十八日、亨進様が世界会長に就任した頃から、顯進様は真の父母様の指導や指示に従わず、別の動きをするこ

とが顕在化するようになりました。

二〇〇九年三月八日、いわゆる「束草事件」のとき、真のお父様は「顯進、おまえも別の所に行かず、父の所に来て、父に付いて回りなさい」（マルスム選集609-133）と命じられました。顯進様はそれに従わず、同年九月十日を最後に、真の父母様の前に姿を見せなくなりました。

そのような状況の中、二〇一〇年六月五日、真の父母様は「真の父母様宣布文（以後、「宣布文」）を作成し、その映像も公開されました。

金鍾奭氏は『統一教会の分裂』で、この「宣布文」を「創始者の『異端者・爆破者』宣布文」（173ページ）と名付け、それが「統一教会から文顯進を完全に除去するために作成された作品」（同）であり、さらに、これを「文亨進は自身が創始者の『代身者・相続者』（同）であると主張する、核心的根拠だと述べています。

しかしながら、『統一教会の分裂』は、この「宣布文」の作成過程における真の父母様の会話の一部を削除し、意図的に編集を加え、「宣布文」に込められた真の父母様の真意である、その心情、事情、願いというものを隠蔽しているのです。

はこの部分を用い、最初の「宣布文」は「創始者の『異端者・爆破者』宣布文」（173ページ）だと主張します。しかし「宣布文」は、これが全文ではありません。以下、引用します。

「特報事項は天宙統一教、世界統一教宣教本部の公文のみ認定する。2010年（天暦）4月23日（陽暦）6月5日、韓国天正宮（博物館）で發布する。文鮮明」

色紙の裏面に書かれた「特報事項」を『統一教会の分裂』は意図的に削除し、隠蔽しています。同書は「特報事項」における真の父母様と亨進様とのやり取りを部分的に記載してはいますが、核的なみ言は全て削除しています。実は、その削除部分にこそ、この「宣布文」における真の父母様の「真意」があるのです。

真のお父様が「宣布文」を作成されている動画は18分10秒の映像ですが、『統一教会の分裂』は、そのうち13分03秒までの映像の会話だけを記載しており、それ以降のみ言は全て削除しています。

真のお父様は「特報事項」を、色紙のもう一面（裏面）に書いておられ、「天宙統一教、世界統一教宣教本部の公文のみ認定する。文鮮明。2010年（天暦）4月23日。韓国天正宮（博物館）で發布する」（動画16分47秒〜17分03秒）と語られました。そして「これとこれ二つ、表裏で一つだ。内と外。事実である」（動画17分09〜12秒）と説明しておられます。この部分のみ言が『統一教会の分裂』には全く記載されていません。

「これとこれ二つ」とは、色紙の両面に書かれた内容であり、「表裏で一つ」とは、色紙の表側と裏側で一つの宣布文という

意味です。色紙の表側と裏側の内容は「宣布文」の「内と外」の関係であり、真のお父様が言われるとおり「事実」なのです。

②「宣布文」が、真のお父様の「宗教的生命と神性を破壊」したとの虚偽

『統一教会の分裂』で金鍾奭氏は、この「宣布文」が、真のお父様の「宗教的生命と神性を破壊」したと次のように述べています。

「創始者の宗教的生命はこの動画と宣布文の拡散によって被害されたのである。……創始者のカリスマは、無能で貪欲であり、世俗的なレベルに転落した。この動画と宣布文を企画し流布した者は、創始者のカリスマを崩壊させ、彼の宗教的生命と神性を破壊した者である」（175～176ページ、圏点は教理研究院による）

これも、『統一教会の分裂』が描こうとする、虚偽のストーリーに基づいた誤った主張です。

また、『統一教会の分裂』169ページには、真のお父様が色紙の表側を書かれたあと、真のお母様や亨進様と次のようなやり取りをされたと記されています。

「韓鶴子…これ、全部出してもいいですか？」

文亨進…言葉がちょっと強いから…

韓鶴子…これは少し強すぎるから。

創始者…何。

韓鶴子…これ、全部インターネットに上げる？

創始者…上げなきゃ」

のとおりです。

「創始者…保管って、保管ではなくこれを宣布しなくては、誰が保管するの。これを宣布しなさいというのです」（動画4分28～33秒）

以上のように、『統一教会の分裂』は、真のお父様が「保管って誰が保管するの。そうするんだよ全部」と語られたかのようにみ言を改竄しています。つまり、お父様が「宣布文」をネットに上げずに保管しておきなさいと指示されたかのように描写しているのです。

しかし、実際は、真のお父様が「公開」を願われ、「保管ではなくこれを宣布しなくては、誰が保管するの。これを宣布しなさい」と強く命じておられるのです。

『統一教会の分裂』がこのように改竄するのは、真のお母様と亨進様が「動画と宣布文を企画し流布した者」（175ページ）であると描き、それによって、お母様が「創始者のカリスマを崩壊させ、彼（注、お父様）の宗教的生命と神性を破壊した者」（175～176ページ）であるかのように読者に印象づけ、お母様をおとしめようとするためなのです。

実際には、真のお父様ご自身がこの「宣布文」を「保管ではなくこれを宣布しなくては」ならないと指示しておられたのであって、「（お父様の）宗教的生命はこの動画と宣布文の拡散によって被害された」などという事実は全くない、というのが真相なのです。

（2）「宣布文」は、顯進様を「除去するために作成された作品」ではない

このように、真のお父様が「それ以外の人は異端者であり爆破者である」と書かれたあと、真のお母様や亨進様はそれに対して「言葉がちょっと強い」と躊躇しておられるように書かれています。そしてお母様が「これ、全部インターネットに上げる？」とお父様に尋ねられると、お父様は「上げなきゃ」と語られ、その後、お母様は次のように語られたとあります。

「韓鶴子…全ての宣教国は全て、あの全ての統一の民は世界宣教本部の公文の指示事項のみ認めろということにサインするのは嫌ですか？（そのようにして）インターネットに上げれば、何の欠点もありません。顯進だけ、食口が知れば、顯進は言うことを聞きますよ。これ（全判、全体の内容を書かれたもの）は保管しますよ」（169ページ）

ところが、この傍線部分の翻訳は正しくありません。正しくは、「食口が知れば、顯進の言うことを聞きます」です。「顯進は」ではなく「顯進の」です。

すなわち、真のお母様は宣布文の裏側の「特報事項」の「世界統一宣教本部の公文のみ認定する」を「食口が知れば、（食口は）顯進の言うことを聞きます」と語られ、そのうえで「これ（色紙）は保管しますよ」と語っておられるのです。

ところが『統一教会の分裂』は、表側の内容を「食口が知れば、顯進は言うことを聞きます」だから「これ（色紙）は保管しますよ」と語っておられるかのように改竄しているのです。そして、真のお父様はお母様に次のように語られたと書いています。「創始者…保管って誰が保管するの。そうするんだよ全部」（同）

しかし、これは動画を見れば、実際のみ言の隠蔽であり、改竄です。隠蔽された部分を傍線で表し、正確に表記すると以下

①「宣布文」作成に至るまでの経緯

二〇〇九年三月八日、いわゆる「束草事件」のとき、真のお父様は人事措置をされました。

『統一教会の分裂』は、それを「文顯進UPF及びGPF会長停職」（150ページ）と述べていますが、実際は、真のお父様は「金起勳を顯進の代身として立てるのです。顯進は勉強しなければなりません。……アベルを神様とアダム、エバよりもっと愛さなければならぬのです」（マルス選集609～131）と語っておられます。

真のお父様は、このとき顯進様に対し「UPF会長とGPFを一年間休み、金起勳牧師が代わりにする」よう人事措置をされました。ところが、顯進様はそれを無視して、「フィリピンGPCを二〇〇九年十二月に予定通り推進しよう」（162ページ）としたのです。顯進様は同年十一月二十日、お父様に宛てて次のような書信を送っています。

「私は状況がどうであれ、ここで決してあきらめて退くことはできません。……十二月十日から十四日まで、フィリピンのマニラで開催されるGPCは、中断されたり延期されることはありません。……お父様が透明かつ公正に中心を掴んで導いて来られた神様の摂理を原理的でない方法で左右しようとすることには到底、従うことができません」（162～163ページ）

顯進様は、真のお父様の人事措置を断って、「状況がどうであれ、ここで決してあきらめて退くことはできません。……GPCは、中断されたり延期されることはありません。……到底、従うことができません」と述べています。それを『統一教会の

分裂」は、「創始者の意図を守るために行くべき道を行くという文顯進の意志が現れている」と持ち上げますが、実際は、お父様の指示に対し「到底、従うことができません」と明言する。不従順宣言であり、そこには、お父様の意図に反しても自分の道を行く、という姿勢が現れています。

お父様の本来の意図は、「顯進が（金起勳氏に）待つて協助する立場に立つ」（マルスム選集609-134）ことを通して、「アベルを神様とアダム、エバよりもつと愛さなければならぬ」という「カイン・アベルの関係」を学ばせるためのものとした。しかし、顯進様はそれに従わず、同年十二月十日、「フィリピンを訪問してGPCを強行」（164ページ）したのです。そして、『統一教会の分裂』は、二〇一〇年五月末、顯進様が「ブラジルを訪問し、ビショッブ・フレイレラと会い南米GPF活動の支援を得るなど、活発な活動」（165ページ）をしていたと記し、その後、同年五月三十日、「ブラジル教会を訪問した際、責任者である申東謀が韓国本部の指示により文顯進が教会の壇上に立てないように」（同）しようとする出来事が起こったと述べます。

当時、南米の大陸会長であった申東謀氏は「統一教会人たちに引き摺り下ろされ」（同）、顯進様がブラジル教会の壇上と本部を占拠し集会を行ったというのです。

『統一教会の分裂』では、「韓国本部の指示により文顯進が教会の壇上に立てないように」（同）と述べていますが、二〇一〇年六月二日付の「世界宣教本部」（当時）の公文によれば、顯進様のブラジル教会訪問と日曜礼拝での集会の件で、申東謀大陸会長は世界宣教本部の公文を通じて、真の父母様から、特別指示を受けていたのです。それは、顯進様は「真の父母様の許諾なく公式的な食口集会で説教をできない」ということで

ンするのは嫌ですか？」と真のお父様に何度もお願ひされ、お父様が「なぜ、しきりにそうなの？」と理由を尋ねられると、お母様は「宣教本部を認めないから」「世界宣教本部から出る公文だけ、民は認めろ、これですよ。……食口を教育をしなれば」「法人を受けた名前を無視するんですよ、顯進が」「無知な食口は、これ、宣教本部から出る公文は偽者だ。これではいけないから」等々と語ったとされています。

これは、前述したブラジル教会で起こった事件に関連している内容です。なぜなら、『（顯進様が）真の父母様の許諾なく公式的な食口集会で説教をできない」という指示を、「世界宣教本部」の公文を通じてブラジル本部に事前に送り、問題を解決するように伝えたにもかかわらず、申東謀氏が「統一教会人たちに引き摺り下ろされ」、顯進様がブラジル教会の壇上と本部を占拠し、集会を行ったからです。

このような事態による混乱を收拾するため、真のお母様は、食口の教育のために色紙の裏側の「特報事項」の「世界統一教宣教本部の公文のみ認定する」という内容を書かれるよう真のお父様に何度もお願ひされたのです。

しかし、『統一教会の分裂』は、「統一教会から文顯進を完全に除去するために作成された」という虚偽のストーリーを描くために、色紙の裏側の「特報事項」や、真のお父様とお母様の会話のやり取りの核心部分を全て削除しているのです。

真のお父様は「宣布文」のあとに「特報事項」を書かれ、それを真のお母様に渡されて次のように会話しておられます。

真のお母様「ありがとうございます。何度も、二度三度、申し上げて、申し訳ありません。事が、さらに広がる事ができないようにしようと」

した。

さらに、翌日の早朝訓誡会で、顯進様が「彼（申東謀氏）の頭を小突き、座っている申東謀の足を蹴る」（166ページ）という暴行事件を起こしました。

このことで、同年六月二日付の「世界宣教本部」の公文を通じて、真の父母様の特別指示が再度あり、それは「真の父母様はこのような暴力は絶対に容認できず、今後、顯進様は真の父母様の裁可を受けずしては、絶対に公式的な集会や教会で講演や説教を行ってはならない」という内容でした。

顯進様のこの暴力事件について、『統一教会の分裂』も「非統一教会人の観点からすると、文顯進の行為は非道徳的であり、暴力的であり、合理化しにくいのは事実である」（同）と認めています。

このように顯進様の一連の行動は、真のお父様の人事措置に対する不従順、真の父母様の特別指示や「世界宣教本部」の公文を無視して、さらには責任者に対する暴行にまでエスカレートしていきました。

これが、最初の「宣布文」を真の父母様が作成するに至った経緯なのです。

②「宣布文」作成に込められた真の父母様の願い

『統一教会の分裂』（169-173ページ）に、真のお父様が「宣布文」を色紙の表側に書かれたあと、真のお母様と会話された内容として次のように書かれています。

真のお母様は、「全ての宣教国は全て、あの全ての統一の民は世界宣教本部の公文の指示事項のみ認めろ」というここにサイ

真のお父様「広がれば、天が放っておかない。連れていってしまうよ。全て」

お母様「はい。その前に悔い改めていけるように」

このように、真のお母様はブラジル教会の事件によって、混乱が「さらに広がる事ができないようにしよう」とされ、『特報事項』の内容を真のお父様にお願ひされたのです。

そして真のお父様が、このような混乱が「広がれば、天が放っておかない。連れていってしまうよ。全て」と語られたことに対して、真のお母様は深刻な思いで、事件の当事者が「その前に悔い改めていけるように」との心情を吐露されているのです。

このように「宣布文」とは、顯進様を「除去するために作成された作品」ではなく、ブラジルで生じた混乱を收拾するためのものであり、顯進様やUCI側の人物たちが「悔い改めていけるように」しようとしたものです。

ところが、『統一教会の分裂』は、そのような真の父母様の心情、事情、願ひを無視し、み言の隠蔽によって、そこに込められた真の父母様の真意をゆがめ、顯進様を「宣布文」の犠牲者に仕立て上げようとしているのです。

（3）亨進様が、「自身が創始者の『代身者・相統者』と主張する根拠の誤り

『統一教会の分裂』は、「統一教会を離脱した文亨進が『代身者・相統者』（173ページ）であると主張する核心的根拠は、宣布文のこの部分であると述べます。

「万王の王は一人の神様、真の父母様も一人の父母、万世代

の民も一つの血統の国民であり、一つの天国の子女である。天宙平和統一本部も絶対唯一の本部である。その代身者・相続者は文亨進である。それ以外の人は異端者であり爆破者である」(173ページ)

しかし、この内容は「宣布文」の表側だけの内容にすぎません。前述のとおり、宣布文は「表裏で一つ」であると真のお父様が語っておられるように、表側だけで判断してはいけません。『統一教会の分裂』は、裏側を隠蔽することで、かえって亨進様に「文亨進が『代身者・相続者』だと主張する余地を与えています。しかし、「宣布文」の表側の「その代身者、相続者は文亨進」という部分だけをもって、亨進様が「自身が創始者の『代身者・相続者』」(173ページ)と主張できる核心的根拠とはなりえないのです。

真のお父様と真のお母様、亨進様のやり取りを映した「寢室の動画はこの証拠」(同)なのです。

『統一教会の分裂』(168～173ページ)は、「寢室の動画」の内容を記載していますが、この宣布の核心的な内容は「宣布文」の裏側に書かれた「特報事項」についてのやり取りなのです。ところが、『統一教会の分裂』は、「宣布文」が表側だけかのように描いて、「特報事項」については削除しているため、まるで「韓鶴子の強力な要求に応じて、創始者は最初の宣布文を作成した」(173ページ)かのように読者は受け取ってしまいます。

しかし動画では、真のお父様が「特報事項」を書き終えたあとで、真のお母様はそこで初めて「ありがとうございます。何度も、二度三度、申し上げて、申し訳ありません」と語っておられますが、『統一教会の分裂』は、このお母様のみ言をも削除しています。それは、虚偽のストーリーをつづるためな

場であるということです。

現在、亨進様は「統一教会を離脱」しており、家庭連合の世界会長立場にはありません。現在の亨進様は、真の父母様の『代身者・相続者』という立場の「世界会長」という位置から完全に離脱しているのです。

さらに、亨進様は非原理集団・サンクチュアリ教会を立ち上げ、真のお母様を「墮落したエバ、バビロンの淫婦、レズビア人」(173ページ)と非難し、今では、真のお父様と故・姜賢實氏とを「結婚」させ、故・姜賢實氏が「真の母」だと偽る歴史的な重罪を犯しています。正に、亨進様の今の姿は「異端者であり爆破者」の姿なのです。

(注、このお父様と姜賢實氏の「結婚」の問題点については、真の父母様宣布文サイトの映像「姜賢實氏の再婚問題とサンクチュアリ教会の「祝福式」が示す異端性」を参照のこと。
https://trueparents.jp/?page_id=4352)

以上のように、「宣布文」は、金鍾奭氏が記述しているような「統一教会から文顯進を完全に除去するために作成された作品」でも、亨進様が「創始者の『代身者・相続者』」であると宣布したものではありません。この「宣布文」は、真の子女様が真の父母様を否定することによって宣布せざるをえなかったものであり、真の父母様が悲痛な心情をもって作成されたものののです。

ところが、『統一教会の分裂』は、そのような真の父母様のみ言を改竄し、顯進様を「悲劇の犠牲者」であるかのように祭り上げようとしているのです。

のです。
「寢室の動画」の中でのお父様のみ言を次のように記載しています。

「天宙平和統一連合本部は、本部も絶対唯一本部である。この本部が二つであるわけにはいかない」(169ページ)

このように、真のお父様は「本部が二つであるわけにはいかない」と語られ、また、「宣布文」は色紙の「表裏で一つ」だと語っておられます。そして、「宣布文」の表面にある「天宙平和統一本部」とは、その裏面の「世界統一教宣教本部」のことを指しているのです。『世界統一教宣教本部』とは「世界平和統一家庭連合世界宣教本部」のことであり、その「公文のみ認定する」と真の父母様は宣布されたのです。「寢室の動画」の中で、真のお母様は次のように語っておられます。

「世界宣教本部会長の話だけを聞け……それがお父さんのみ言葉ではないですか？……亨進の名前立てるわけでもなく、ただ、お父さんの名前で、世界宣教本部から出る公文だけ、民は認める、これですよ」(169～170ページ)

このように、真のお母様が「亨進の名前立てるわけでもなく」と述べ、「世界宣教本部会長の話だけを聞」き、「世界宣教本部から出る公文だけ、民は認める」と語っておられるように、裏側の「特報事項」を強調しておられます。

「亨進の名前立てるわけでもなく」と語られたように、この宣布文は、亨進様が「創始者の『代身者・相続者』」であると宣布されたものではありません。家庭連合の「世界会長」というその位置こそが、真の父母様の「代身者・相続者」という立

三、いわゆる「文仁進様の米国総会長任命事件」の真相

二〇〇八年七月二十九日、文仁進様は家庭連合の「米国総会長」としての人事発令を受け、同年八月十四日に「米国総会長」就任式がニューヨークのマンハッタンセンターで行われました。これに對し、金鍾奭著『統一教会の分裂』は、「文仁進米国総会長任命事件」(107ページ)と名付け、次のように述べています。

「文仁進米国総会長任命事件」とは「人事権を握った文亨進が、創始者(注、お父様)の指示を無視」(120ページ)して、「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪し、代わりに文仁進を米国総会長に発令」(同)した事件である。この事件は「創始者と文顯進の間を完全に引き裂き、代わりに文亨進を後継者の座に立てる決定的名分」(107ページ)となった。仁進様の「米国総会長」の任命には、「文顯進反対勢力が文顯進を追い出す為に展開するドラマのような過程」(同)であった。

しかしながら、このような『統一教会の分裂』の主張は、事実の曲解、およびみ言改竄に基づいた事実と反するもので、UCI側の人物が「文顯進反対勢力が文顯進を追い出す為に展開するドラマ」だとして捏造した虚偽のストーリーにほかなりません。

(1)「創始者の意思とは無関係に文仁進を米国総会長として発令した」と捏造

『統一教会の分裂』は、UCI側が主張する「文仁進米国総会長任命事件」なるものについて、次のように述べています。

二〇〇八年七月二十九日、文亨進様は「文仁進を米国総会長に発令する人事公文を全世界の統一教会組織に發送」（120ページ）した。「亨進様の名前で發送された韓国語公文には、仁進様の職責が米国家庭連合総会長として發表されたが、英語公文には米国統一運動の責任を負うチェアマンとして發表」（120ページの脚注）され、同年八月十四日に「文仁進の米国総会長就任式」（123ページ）が挙行された。韓国の月刊誌『統一世界』二〇〇八年九月号の記事には「文亨進世界会長によって去る七月二十九日、米国総会長として人事発令を受けた文仁進の就任式が八月十四日、マンハッタンセンター七階で全国公職者及び平和大使など五百人余りが集まる中で晚餐形式で挙行された」（123ページの脚注）と掲載された。

このように、「文仁進米国総会長任命事件」とは、亨進様が「二〇〇八年七月二十九日に創始者の意思とは無関係に文仁進を米国総会長として発令」（142ページ）したことをいう。

しかしながら、この記述は、事実に戻しています。二〇〇八年七月二十九日付の家庭連合世界本部の韓国語公文には、次のように書かれています。

「二〇〇八年七月二十九日、真の父母様の指示により、米国総会長に対する人事発令（新規）をお知らせします」（注、翻訳は教理研究院による）
そして、その公文の英語版は次のようになっています。
「This is to announce the appointment of the Chairperson of the Unification Movement in America according to True Parents instructions given on July 29, 2008.]

たと述べて、両者はそれぞれその意味を違えて表記しているのだと主張します。

これは、亨進様が仁進様を家庭連合以外の「米国統一運動の責任を負うチェアマン」として発令したかのように読ませることによって、読者に「文顯進の地位を剥奪」したと思わせるためです。

さらに『統一教会の分裂』は、韓国の月刊誌『統一世界』二〇〇八年九月号134ページから「文仁進様米国総会長就任式」の記事を引用するとき、「文亨進世界会長によって去る七月二十九日、米国総会長として人事発令を受けた文仁進の就任式が八月十四日、……挙行された」（123ページの脚注）と記述しています。

しかし、『統一世界』二〇〇八年九月号の実際の記事は「真の父母様の指示によって去る七月二十九日、米国総会長として発令を受けた文仁進様家庭の就任式が八月十四日、……挙行された」（注、翻訳は教理研究院による）となっています。

「文亨進世界会長によって」ではなく、「真の父母様の指示によって」と記載されているにもかかわらず、引用するときに書き換えているのです。これは完全な改竄です。

（2）「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪し、代わりに文仁進を米国総会長に発令」したと歪曲

『統一教会の分裂』は、亨進様が「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪」したとして、次のように述べています。

真のお父様は二〇〇五年一月初め頃、「文顯進、文國進、文亨進の三人の息子に対する責任」（120ページ）を明確にされ、

この家庭連合世界本部の公文を見れば、文仁進様は「二〇〇八年七月二十九日、真の父母様の指示」によって人事発令を受けています。したがって、『統一教会の分裂』の主張、「文亨進は、二〇〇八年七月二十九日に創始者の意思とは無関係に文仁進を米国総会長として発令」は、事実に戻するものです。

世界本部の韓国語の公文には「米国総会長」として発令されたと書かれており、英語公文には「Chairperson of the Unification Movement in America」とあります。また、その公文の中で、仁進様の所屬 (Location) は「F&W PU International」、すなわち家庭連合の「世界本部」となっています。

したがって、仁進様は家庭連合の「世界本部」の所屬でありながらも、米国の家庭連合内の「Chairperson of the Unification Movement in America」として「二〇〇八年七月二十九日、真の父母様の指示」によって人事発令を受けているのです。

以上の内容を補足して、「Chairperson of the Unification Movement in America」を邦訳するならば、「アメリカ国内の（家庭連合における）統一運動の総会長」となります。

家庭連合世界本部の英語公文では、家庭連合の「米国総会長」を「Chairperson of the Unification Movement in America」と表記しているのであり、その意味は「アメリカ国内の（家庭連合における）統一運動の総会長」というものです。

ところが、『統一教会の分裂』は、韓国語公文も英語公文も同じ内容であるにもかかわらず、仁進様の人事発令が、韓国語公文では「米国家庭連合総会長」として發表され、英語公文では「米国統一運動の責任を負うチェアマン」として發表され

顯進様は二〇〇八年七月頃まで「北米と南米に対する責任」（同）を負っていた。当時の米国には、「全体の責任を負う大陸会長」があり、その上に文顯進が実質的な責任者の役割を遂行」（120ページの脚注）していた。しかし、二〇〇八年七月二十九日、亨進様は、「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪し、代わりに文仁進を米国総会長に発令」した。

二〇〇八年九月十四日（秋夕）、顯進様は「真のお父様から」米国総会長は文顯進であり、文仁進は祝司長（牧師）であるという確答を受け、その内容は文亨進に通知」（128ページ）した。しかし、亨進様は「最後まで創始者の指示を拒否」（同）した。お父様は「二〇〇九年三月八日のいわゆる『東草靈界メッセージ事件』の時まで、米国総会長が文顯進であると思っていた」（同）。

以上は、事実を歪曲して記述されているものです。

二〇〇九年三月八日、いわゆる「東草事件」のときに梁昌植氏が読み上げた「報告書」は、「訓母様の報告書」としてマ

ルスム選集609巻123ページに収録されています。これは、梁昌植氏が真のお父様からの指示事項を整理した「報告書」であり、それをお父様に提出してチェックを受けた文書です。「真の子女様の使命に対する真の父母様のみ言整理報告書」という性格のものであり、真のお父様のみ言です。

この「二〇〇九年三月八日、東草報告書」には、顯進様や仁進様の使命に関する真のお父様のみ言が次のように記されています。

「顯進様は米国の総会長として南北米事業とUCI傘下ワシントンタイムズ、トゥルーワールドなど各種摂理機関を総括指

揮します。顯進様は特にワシントンタイムズおよびUPIなど報道機関を総括し米国運動の外的拡散」(9ページ)

「仁進様は真の家庭で初めて任命を受けた祝司長として米国家庭連合に対する総括責任……家庭連合のCEOとして家庭連合に対する人事権と財政権を持つて文亨進^{ヒョングン}世界総会長の指示を受け(る)」(9〜10ページ)

すなわち、「米国総会長」としての顯進^{ヒョングン}様に対する真のお父様の認識は、「南北米事業とUCI傘下ワシントンタイムズ、トゥルーワールドなど各種摂理機関を総括指揮」する立場での「米国総会長」です。お父様は、顯進様の使命に関して梁^{ヤン}氏がまとめた「報告書」の内容を聞かれ、「外的だ、外的、そっだ」(9ページ)と語っておられるように、家庭連合以外の「外的」な「各種摂理機関を総括指揮」する「米国統一運動の責任を負うチェアマン」という認識を持つておられます。

それに対し、「米国総会長」としての仁進様に関する真のお父様の認識は、「祝司長として米国家庭連合に対する総括責任」の立場です。仁進様は「米国家庭連合のCEOとして家庭連合に対する人事権と財政権」を持ち、「アメリカ国内の(家庭連合における)統一運動の総会長」の立場であり、「祝司長」という内的な「米国総会長」です。

『統一教会の分裂』は、二〇〇八年七月二十九日、亨進様が仁進様を「米国統一運動の責任を負うチェアマン」として「米国家庭連合に発令」し、「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪」したのだと述べていますが、このような主張は「米国総会長」としての顯進様と仁進様の責任に関する、真のお父様の認識とは完全に食い違っており、事実には反するものです。

また、『統一教会の分裂』は、真のお父様が「二〇〇九年三

顯進に米国総会長職の発令をしなかった」(同)のである。

しかし、「世界宣教本部」から二月二十四日付で公文が発送されたが、そこには「文亨進が組織上創始者の代身者であり、文顯進の上司であることを明示する図表」(145ページ)があった。これは、「文仁進の報告を伝え聞いた宣教本部側で文顯進を意識し急遽、作った公文」(同)にすぎない。やはり、真のお父様の「指示が今度も守られるわけがなかった」(142ページ)。

しかしながら、これらの内容もまた、虚偽のストーリーであり、事実には反します。

『統一教会の分裂』は、真のお父様が國進様に「二〇〇九年二月十五日」の訓読会で「日本の国は國進が責任」を持つと語られて「人事措置」をされ、國進様は「その翌日(二月十六日)に日本に出国」したと述べています。

しかし、二〇〇九年二月十七日付の「世界宣教本部」(当時)の公文によれば、同年二月十六日に真の父母様の願いを受けて、日本の全国祝福家庭総連合会総会長の離就任がありました。それは、國進様に対する人事措置ではありません。しかも、その日付は「二月十五日」ではなく、「二月十六日」です。

二〇〇九年二月十九日午後四時から東京・渋谷の松濤本部の礼拝堂で、全国祝福家庭総連合会の総会長の離就任式が執り行われ、任導淳氏から宋榮錫氏に交替しました。國進様は日本の総会長の離就任式のために二月十七日、日本に出国されたのであって、「その翌日(二月十六日)」ではありません。

また、マルスム選集607巻には二〇〇九年一月二十四日から二月十六日までの真のお父様の^{ミヤ}みが収録されていますが、二月十五日の訓読会のみ言は収録されていません。二月十三日

月八日のいわゆる『^{ソクチャ}束草靈界メッセージ事件』の時まで、米国総会長が文顯進であると思っていた」と述べていますが、お父様は当初から「南北米事業とUCI傘下ワシントンタイムズ、トゥルーワールドなど各種摂理機関を総括指揮」する「外的」な立場の「米国総会長が文顯進」であると思っておられたのです。それゆえ、「文仁進^{ムンインジン}を米国総会長に発令」したことが「米国総会長であった文顯進の地位を剥奪」したというのは、事実には反する記述です。

(3) 亨進様は「文顯進に米国総会長職の発令をしなかった」という虚構

『統一教会の分裂』は次のように、亨進様が「文顯進に米国総会長職の発令をしなかった」(143ページ)と述べています。

真のお父様は、二〇〇九年二月の中頃に韓国に戻られ、二月二十日の訓読会で「韓国は亨進が責任を持ち、日本の国は國進^{クンジン}が責任を持ち、米国は顯進が責任を持つ」(141ページ)と語られた。このように、お父様は「二〇〇九年二月十五日、二十日など続けて……三兄弟の責任分野を言及する中で、米国は文顯進が責任を持たなければならない」(143ページ)とされ、「米国総会長は文顯進」(141ページ)であることを明確にされた。

真のお父様は、「二日続けて訓読会でこのような人事措置について言及し続けた。文國進は即時その翌日に日本に出国し、その日に日本総会長は任導淳^{インドクジュン}から……宋榮錫^{ソングンシク}に交替した。文顯進は米国で消息を聞いて公式的な通知を待ったが、一週間経っても何の発表もなかった」(143ページ)。結局、亨進様は「文

当時、真の父母様はハワイに滞在しておられ、二月十五日に真の父母様はハワイから韓国に移動されました。翌十六日に真の父母様の「帰国歓迎集会」が韓国の天正宮博物館で開催され、同日、真の父母様の特別指示により日本の総会長を祝福してくださったのです。

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「二〇〇九年二月十五日」の訓読会で「三兄弟の責任分野を言及」され「日本の国は國進が責任」を持つと語られ、國進様に対する「人事措置」をされたと述べますが、二月十五日の訓読会のみ言などはなく、これは虚偽です。

さらに「その日(二月十五日)に日本総会長は任導淳から……宋榮錫に交替」し、「その翌日」の十六日に國進様が「日本に出国」したというのも、事実とは異なります。

よって、「二〇〇九年二月十五日」の訓読会で、真のお父様が「韓国は亨進が責任を持ち、日本の国は國進が責任を持ち、米国は顯進が責任を持つ」と語られた事実はなく、三兄弟に対する「人事措置」もしておられません。

また、『統一教会の分裂』は、真のお父様が「二〇〇九年二月二十日」の訓読会で「米国総会長」として、文顯進様に言及された^{ミヤ}と述べますが、これは前述したように「外的」な「各種摂理機関を総括指揮」する立場である「米国総会長」としての顯進様について言及しておられる内容です。

つまり、改めて顯進様に対し「人事措置」を行う必要などないのです。したがって、お父様が顯進様に対して米国総会長の「人事措置」をされたにもかかわらず、「文顯進に米国総会長職の発令を(亨進様は)しなかった」と述べることは、事実にはない、虚偽のストーリーにほかなりません。

『統一教会の分裂』は、二〇〇九年二月二十二日、当時、米

国大陸会長であった金炳和氏が金孝律補佐官（当時）に送った書信で、「米国ではお父様が最近語られた内容に従い、顯進様が教会を含み全ての統一運動の責任を任された」（145ページの脚注）と述べていますが、真のお父様が顯進様に對し「教会を含み全ての統一運動の責任」としての米国総会長の「人事措置」をされた事実はありません。教会における「米国家庭連合のCEOとして家庭連合に対する人事権と財政権」を持つ「アメリカ国内の（家庭連合における）統一運動の総会長」、「祝司長」としての内的な「米国総会長」は、仁進様なのです。よって、亨進様が「文顯進に米国総会長職の発令をしなかった」のは当然のことなのです。

二〇〇九年二月二十四日付の世界宣教本部（当時）から「全世界の組織に関する真の父母様の特別指示の件」と題して公文が発せられました。『統一教会の分裂』は、それを「宣教本部側で文顯進を意識し急遽、作った公文」だと述べています。

しかし、その公文には「二〇〇九年二月二十三日、真の父母様の特別指示により下記のように全世界の全ての組織に対する主管を明確にしようと思います」（翻訳は教理研究院による、以下同じ）と明記されているように、「宣教本部側で文顯進を意識し急遽、作った公文」などではありません。その公文は「真の父母様の特別指示」によるものです。

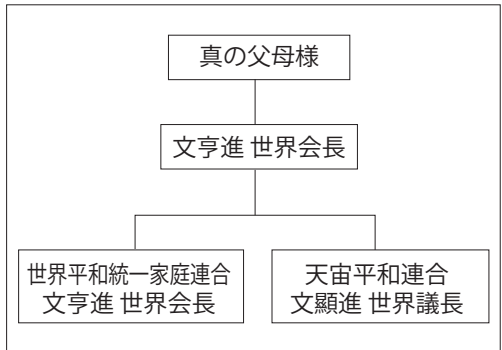
さらに、『統一教会の分裂』は、その公文の内容について「文亨進が組織上創始者の代身者であり、文顯進の上司であることを明示する図表」があると述べていますが、その公文には、次のような図と説明がなされています。

「全ての組織は真の父母様の指示を受け、文亨進世界会長が総括する。あわせて、世界基督教統一神霊協会と世界平和統一家庭連合などの教会組織は、文亨進世界会長が主管し、宇宙平

和連合は文顯進世界議長が主管する」
「すべての指導者たちは別の大陸の国で行事や大会を開催する場合、まず、世界宣教本部に報告し承認を受けた後、実施するようにする」

このように、二〇〇九年二月二十四日付の公文の図表は、「文亨進が組織上創始者の代身者」を明示する図表ではなく、全ての組織は「真の父母様の指示を受け、文亨進世界会長が総括する」という立場を明確にしている図表です。

さらに、これは、亨進様が「文顯進の上司」という「上下の関係」を示した図表ではなく、「教会組織は文亨進世界会長が主管」し、「宇宙平和連合は文顯進世界議長が主管」するということを表したものであり、「並列の関係」を示している図表です。



「統一教会の分裂」は、真のお父様の「指示が今度も守られるわけがなかった」と述べていますが、上述の公文は「真の父母様の特別指示」によるものです。

ところが、顯進様は、このような「真の父母様の特別指示」に對して「非常に不快な気分を現わし、職権で米国統一教会理事會を召集」（145ページ）するに至ったのだと『統一教会の分裂』は述べています。

以上のように、仁進様の「米

教会の分裂』の言う、いわゆる「文仁進米

国総会長任命事件」というようなものではありません。また、「文仁進米国総会長任命事件」が「人事権を握った文亨進が、創始者の指示を無視」して、「米

国総会長であった文顯進の地位を剥奪し、代わりに文仁進を米

国総会長に発令」した事件であると述べますが、その主張もみ言の改竄や事実隠蔽による虚偽の主張です。

米国家庭連合元会長であるマイケル・ジェンキンス氏の二〇一〇年七月一日の「報告書」によれば、顯進様が「真のお母様と兄弟たちが真のお父様の指示をコントロールしている」と語っていたことを報告しています。さらに、『統一教会の分裂』も、「文顯進は母・韓鶴子と二人の弟、即ち文國進及び文亨進と葛藤している」（123ページ）と述べています。

このように、顯進様は、亨進様が世界会長を務める世界宣教本部（当時）から出される「真の父母様の特別指示」の公文に對して、それは自分に対する母と弟たちの陰謀であるとの猜疑心から、不信任を強く持っていたのです。

すなわち、世界宣教本部から出た二〇〇九年二月二十四日付の公文である「真の父母様の特別指示」に對し、顯進様は「非常に不快な気分」であったということです。それで、顯進様は「米

国教会理事會」の構成員を、自分の意に従う人間へと変更することを強行しようとする大事件（米

国教会理事會乗っ取り未遂事件）を引き起こしていったのです。真のお父様は、次のように語っておられます。

「皆さんは直接神様と通ずる道がないので、先生が橋を架けてあげています。……ですから公文を重要視し、本部で送る発刊物を重要視せよという話もするのです」（『牧会者の道』393ページ）

「真の父母様の特別指示」は、家庭連合世界本部の公文を通じて伝達されています。また、真のお父様は「蕩滅復帰の峠を越えましょう」というみ言の中で、「すべて問題は中心者となつになることです。その人の教えとか、その人の業績を共にすることによって蕩滅されるのです。……神様解放まで行くには、真の父母と共に、その蕩滅の道を行かなければならないのです」（『男性訪韓修練會御言集』213～214ページ）と語っておられます。

お父様の願いが公文を通じて伝達されても、顯進様はそれに対する猜疑心を持っており、それが顯進様の行く道を難しくしたのと言えます。

四、文顯進様による「米

国教会理事會乗っ取り未遂事件」の真相
既述のように、二〇〇八年七月二十九日、真のご家庭の三女の文仁進様が、真の父母様の指示によって米国家庭連合の総会長の人事発令を受け、同年八月十四日「米

国総会長」に就任しました。
そして八月二十一日、仁進様は米

国総会長の職権によって米

国教会の理事會役員を変更しました。これについて『統一教会の分裂』は「文仁進の不法理事會変更」（151ページ）と述べています。

しかし、梁昌植氏が真のお父様の指示事項などを整理した「二〇〇九年三月八日、束草報告書」に、米

国教会の理事會は「法律による法的権限は理事會が持つ」（14ページ）とあるように、仁進様はそれに基づいて理事會役員を変更したのであって、「不

法理事会変更」をしたわけではありません。

ところが文顯進様は、あくまでも「不法理事会変更」であるとし、「元来どおりに理事会を戻す」「統一教会の分裂」145ページ）ことを意図して理事会を招集しました。しかし、六対五の票決により理事会の開催自体が中止となりました。

顯進様が理事会を開催しようとしたこの事件が「米国教会理事会会乗っ取り未遂事件」です。

(1) 金炳和氏の虚偽に基づく声明文

『統一教会の分裂』によると、当時、米国教会理事会の理事の一人で元北米大陸会長であった金炳和氏は、二〇一七年十月十六日「真実の前に沈黙を破って」と題する声明文を発表しました。その声明文で彼は次のように述べています。

「顯進様は二〇〇九年二月……アメリカ教会の理事会を招集し、理事を本来のメンバーに戻そうとされました。私も当時、アメリカ教会の理事だったので、二〇〇九年二月二十六日に開催された臨時理事会に参加することになりました。ところがこの会議は、最終的に國進様と亨進様、仁進様の反対により無効となりました。……二月二十六日、理事会が無効になった直後、私たち夫婦は顯進様に待って束草に最初に到着し、お父様にお会いし、理事陣復帰のためのこれまでの経緯を報告しようとしたのですが、お父様は……一切報告を聞こうとしませんでした。結局、この対立は繕われないまま、顯進様は翌日の二月二十七日、GPFの世界ツアーのために日本に出国されました」（5ページ。太字は教理研究院）

しかし、この説明は事実と異なっています。

切りに……主要国家を巡回する予定」（『統一世界』二〇〇九年三月号103ページ）でしたが、実際の日本大会は「二月二十八日」三月一日」（『中和新聞』二〇〇九年三月号、12ページ）に変更し実施しました。

真のお父様は三月八日、いわゆる「束草事件」で次のように語っておられます。

「顯進、あなたが大会を行ったのですが、どこで行ったの？ ……日本大会をするとき、あなたが成功裏に終えたと言い、『マニラに行く』と私に電話したでしょう？ 私は何も言わなかったよ。『早く戻って来なさい』と言ったよ。マニラになぜ行くのかと聞かなかったのです。……（注、真のお父様が）『早く戻って来なさい』と言ったとき、『早く戻る』と言っておいて、どうして遅らせるの？」（『マルスム選集609-1127』）

このように、顯進様は三月一日の日本大会を終えた後、フィリピンに行く前に真のお父様に電話したとき、お父様は「早く戻って来なさい」と語られ、顯進様を待っておられました。

しかし、顯進様はすぐには戻らず、三月一日から始まった原理本体論教育の終わった翌日の三月八日、いわゆる「束草事件」の早朝の訓読会に途中から参加し、真のお父様はそのような顯進様の不従順を叱責されたのです。

金炳和氏が、理事会開催日を米国時間の二月二十六日にしてごまかそうとする理由は、真のお父様が二月二十七日に語られたみ言を顯進様は直接聞いていないこととして、み言に反する行動を取っている事実を隠蔽したいがためと考えられます。

②米国臨時理事会は、実際には韓国時間の二月二十七日に開催

①顯進様が「二月二十七日、日本に出国」したという偽り

金炳和氏は、顯進様は世界ツアーのため「二月二十七日」に「日本に出国」したと述べますが、実際は、「二月二十八日」に「日本に出国」しています。

マルスム選集608巻258ページを見ると、二〇〇九年二月二十七日午後五時から天情苑で「真の父母様主管、特別会議」（教理研究院の訳。以下同じ）が開催され、真のお父様は次のように指示されました。

「万王の王神様解放権戴冠式が終わった次に、大会をしなればなりません。……三月一日からアベルUNを中心として……総会をしなればなりません」、「皆さんが一週間、（原理本体論を受講）するようになれば、私が一週間、講義を聞こうと思います。教育するのがいいですか。しないのがいいですか？ 返事！ 亨進、國進！（はい、教育するのがいいです）いい？ 顯進もいいの？ ……あなたたちも一緒に受ける？（はい）では、明日、明後日（三月）一日から正式プログラムを組みます。……一人も抜けることのないようにしなさい」（マルスム選集608-1269）

真の子女様方は、三月一日から始まった第六回「神様撰理史の責任分担解放圏完成宣布教育」（原理本体論教育）に参加されましたが、顯進様は二月二十八日に日本に出国し、真のお父様が指示された三月一日のアベルUNを中心とした総会や原理本体論教育には参加されませんでした。

当初、顯進様は「日本大会（二月二十七日）三月一日」を皮

前述のとおり、金炳和氏は声明文で米国教会の臨時理事会が「二月二十六日に開催された」と述べています。しかし、梁昌植氏は「二〇〇九年三月八日、束草報告書」で次のように報告しています。

「二月二十七日（米国時間二月二十六日）朝、韓国に入国された顯進様は束草におられた父母様にお目にかかる前に、（韓国の）マリオットホテルにとどまりながら国際電話を通じて米国教会の理事会を招集した」（15ページ）

この内容を総括し、顯進様の行動を整理すると次のようになります。

二月二十七日午前…韓国・ソウルのマリオットホテルから国際電話で米国教会の臨時理事会を開催

二月二十七日午後…韓国の束草に到着

二月二十八日午後…韓国から日本に出国

金炳和氏が述べている米国教会臨時理事会が「二月二十六日に開催された」という説明にはごまかしがあり、これは束草に行く直前、米国時間にすれば「二月二十六日に開催された」というものであり、実際には韓国時間の「二月二十七日」なのです。

このように、金炳和氏の声明文には嘘が含まれています。

(2) 虚偽の証言でつづられた『統一教会の分裂』

①食い違う「K氏の証言」

『統一教会の分裂』は、次のような「K氏の証言」（123ページの脚注）を掲載しています。

「理事会騒動が起きた直後、文顯進は韓国に立ち寄り創始者（注、真のお父様）に会って苦境に立たされた。……『何故、理事会を全て替えたのか』……『お前が米国の責任者なのに、何もしなかったとは何ごとか。もう一度、全て替えろ』と（お父様は）指示した」（太字は教理研究院、以下同じ）

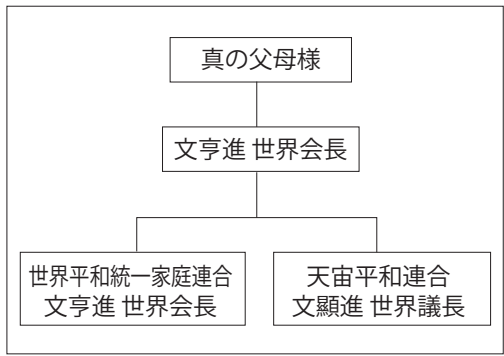
このように「K氏の証言」では「理事会騒動が起きた直後、文顯進は韓国に立ち寄り」とし、顯進様が米国におられたとき騒動が起きて、直後韓国に寄ったかのように述べ、真のお父様が「お前が米国の責任者なのに、何もしなかったとは何ごとか。もう一度、全て替えろ」と指示されたとしています。

それに対し、「文顯進前補佐官K氏の証言」（147ページの脚注）によれば、理事会騒動の直後、「他の兄弟より早く束草に到着した文顯進は金炳和と共に創始者に経緯を報告しようとしたが、創始者は完全に耳を閉ざしていた」（146、147ページ）とあり、両者の証言は食い違っています。また、この「創始者は完全に耳を閉ざしていた」との説明は金炳和氏の声明文と類似します。

②食い違う「仁進様就任以後の改編によって除外された」人物名

『統一教会の分裂』を見ると、「金炳和氏の緊急報告文」では「仁進様就任以後の改編によって除外されていた（理事は）金起勲、朴ジョンへ、フィリップ・シエンカーなどの三人」（144ページの脚注）と述べています。

ところが、「当時、文顯進に随行していたK氏の証言」（『統一教会の分裂』124ページの脚注）によると、仁進様就任以後の改編によって除外された理事は「金炳和、パク・ジョンへ、フィリップ・シエンカーなど三人」となっています。「金炳和



『統一教会の分裂』は、この図に対して「宣教本部側で文顯進を意識し急遽、作った公文」（145ページ）と記述していますが、これは「真の父母様の特別指示」なのです。いわゆる「東草事件」が起こった二〇〇九年三月八日、真のお父様は次のように語っておられます。

「韓国の外的な仕事を誰が責任持ったの？（黄善祚会長です）黄善祚！（はい）黄善

祚の指揮下にあるの？……組織体制で見れば、亨進の指揮下に全て（の組織）が入ったのであって、郭錠煥ではないのです。……私も入っているのです。私も。私がある上にいると思わないのです」（マルスム選集609-126）

このように真のお父様ご自身が「組織体制で見れば、亨進の指揮下に全て（の組織）が入った……私も入っているのです」とまで語っておられます。

櫻井正上氏の「お父様の指示と世界本部（亨進様）の指示が『違って』いた」という主張は誤っています。公文による人事発令や組織体制は、真のお父様の指示と完全に一致しています。櫻井正上氏は、金炳和氏の虚偽の証言にだまされているのです。顯進様は、「真の父母様の特別指示」の公文や図を見て、「非常に不快な気分を現わし、職権で米国統一教会理事会を召集」（『統一教会の分裂』145ページ）しようとしたのであり、これがいわゆる「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」となったの

氏の緊急報告文」と「当時、文顯進に随行していたK氏の証言」では除外された人物名が食い違っているのです。

『統一教会の分裂』は、食い違う内容であっても平然と記載しています。これは、事実関係の検証もせず、情報を垂れ流す「無責任」な行為であると言わざるをえません。

（3）櫻井正上氏は金炳和氏の虚偽証言にだまされている

①「お父様の指示と世界本部の指示が『違って』いた」？

櫻井正上氏は、自身の著書「真実を求めて」37ページで、次のように述べています。

「仁進様の人事が『お父様の人事でなかった』ことは、後に、当時の米国大陸会長が明かしています。……お父様の指示と世界本部の指示が『違って』いた」

しかし、この当時の米国大陸会長である金炳和氏の証言は偽りです。

いわゆる「文仁進様の米国総会長任命事件」については、すでに述べたように、仁進様は「二〇〇八年七月二十九日、真の父母様の指示」によって家庭連合の「米国総会長」の人事発令を受け、就任しています。

また、二〇〇九年二月二十四日付で、世界宣教本部（当時）は公文を発信し、そこには「全ての組織は真の父母様の指示を受け、文亨進世界会長が総括する」とあり、すでに示したように、次の図が添付されています。

です。

②「文仁進様の地位を剥奪するため」だった理事会変更の目的

櫻井正上氏は次のように述べています。

「仁進様の人事が『お父様の人事でなかった』ので、顯進様は「お父様の意向を確認された上で、改めて米国家庭連合の理事会を原状復帰しよう」（『真実を求めて』37ページ）とされた。これが『顯進様側の理事会占拠』、言わば『クーデター』（同）として「顯進様の暴挙として報告、お父様が激怒」（同、136ページ）された。そして、「二〇一〇年二月三日、顯進様、米国家庭連合理事長解任」（同、137ページ）された。

しかし、この説明は事実ではありません。マイケル・ジェンキンス氏は、二〇一〇年七月一日の「報告書」で次のように報告しています。

「（二〇〇九年二月二十七日）我々は国際電話会議により理事会を行いました。……HSA-UWC（米国の世界基督教統一神霊協会）理事長である仁進様が開会を宣言しました。仁進様はお父様の指示に基づいて、理事会に変更を加えないという動議を提出し……理事会は六対五の票決により、会合を閉会することを決め、変更が防止されました。……（お父様は）会合の継続（すなわち、理事会を変更すること）を支持して投票した理事全員に辞任要求通知を出すよう要請され……（彼らは）理事を辞任しました」（4ページ）

この「報告書」にあるように二〇〇九年二月二十七日当時、「仁進様が米国教会の理事長」だったのであり、二月二十七日

の国際電話を通じての米国教会理事会は、六対五の票決で、理事会の会合が中止されたのです。このことで、顯進様を支持して投票した五人の理事全員が辞任することとなりました。

そもそも、顯進様は法的にも実質的にも権限を持った理事ではなかったために、理事会の票決に参加する権限はありませんでした。

櫻井正上著『真実を求めて』に「二〇一〇年二月三日、顯進様、米国家庭連合理事長解任」と述べているのは事実に戻します。真実は、仁進様^{インジン}が法的権限を持った正式な「米国教会の理事長」だったのです。

真のお父様は辞任することとなった理事に対し、次のように語っておられます。

「責任を負った人たちがそこ（理事会変更）に加担して、扇動し手を挙げたならば、その手を挙げたこと自体が問題であつて、誰が挙げさせるようにしたと言う必要はないのです。……本人自身が問題です！ 本人自身が、そのような思想を持っているので、手を挙げたのであつて、そのような思想がなければ、手を挙げると言っても挙げないようにするのです」（マルスム選集609-126）

真のお父様は、理事会を変更しようとした、この「乗っ取り未遂事件」に対し、「手を挙げたこと自体が問題」であると語っておられます。

また、ジェンキンス氏は「報告書」で次のように報告しています。（注、「報告書」で、顯進様の言葉の部分は「楷書体の太字」で、真のお父様のみ言は「網掛けの太字」で表記）

「（二月二十四日）イーストガーデンの顯進様宅での顯進様とHSA-UWCの代表らとの会合で、……顯進様はお父様の補佐官に電話するよう要求しました。……電話がつながれ、彼は

体が父母様の意に逆らっている」とまで警告しています。前もってお父様から「理事会の変更をしないように」と伝えられていたにもかかわらず、五人の理事たちは、顯進様を支持して票決で手を挙げたのです。

この事実を知られた真のお父様は、深刻になられ、お父様の指示に対して背信し「不従順」な行動を取ってしまった理事たちを、いったん辞任するようにされました。

ところが、櫻井正上氏は、「顯進様の暴挙として報告」されたから「お父様が激怒」されたのだと勘違いしています。真のお父様は、理事たちが「手を挙げたこと自体が問題」だったと語られ、そのことを叱責しておられるのです。

また、ジェンキンス氏は、顯進様の要求を次のように述べています。

「自分（顯進様）が要求している変更を実行するよう要求しました。……理事会の公式通知は、理事会に投票権を持つ新しい理事を任命することを要請していました。これは復帰ではありませんでした」（4ページ）

このように、顯進様の要求の本当の狙いは、単に「仁進様就任以後の改編によって除外されていた……三人を理事職に再び元通りに復帰」（『統一教会の分裂』144ページの脚注）させるためではなく、「新しい理事を任命すること」すなわち「顯進様が直接理事長になり実際の米国責任者」（145ページの脚注）になるための理事会変更の要求だったのです。

これは、米国教会理事長である、文仁進様の地位を剥奪するための変更だったのであり、まさしく顯進様による「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」だったのです。最終的に理事会の票決は六対五となり、顯進様を支持する票は五票にとどまり、乗っ取りは未遂となりました。

理事会の変更をしないようにというお父様の願いを確認しました。顯進様はそこに集まった我々に対して、これは心得違いの指導者たちがお父様の指示を歪曲^{ひいまく}しているだけだと告げました。……お父様が間違った情報を与えられた結果として間違った指示が出されたのだと、……（理事会の）変更については後でお父様と話し合うし、自分はお父様の全面的な支持を受けていると言いました。……顯進様は理事会をとにかく開き、自分が要求している変更を実行するよう要求しました」（4ページ）

このように、顯進様は米国教会の理事会に「心得違いの指導者たちがお父様の指示を歪曲している」「お父様が間違った情報を与えられた結果として間違った指示が出されたのだ」と述べ、理事会の「変更については後でお父様と話し合う」と言つて説得したため、一部の理事たちは顯進様を支持して票決で手を挙げてしまったのです。

そのことに対して、真のお父様は「手を挙げたこと自体が問題」であると叱責されました。

梁昌植氏の「二〇〇九年三月八日、束草報告書」は次のように報告しています。

「文亨進会長は世界会長として創始者であるお父様の命令が『理事会議を開かず束草にまず集結するように命じられた』というお父様の意を伝えながら、『理事会の強行自体が父母様の意に逆らっている』ということを警告しました」（15ページ）

このように二月二十七日、韓国で開会された国際電話による米国教会の理事会の会合で、オブザーバーとして参加した亨進様は、真のお父様が「理事会議を開かず束草にまず集結するように」命じられたことを理事たちに伝え、「理事会の強行自

③悔い改めた「理事陣」と、悔い改めなかった「顯進様」

櫻井正上氏は、いわゆる「束草事件」による顯進様の職務停止について、「これらの一連の出来事は即ち、『長子』を潰し、世界摂理を破壊し、統一運動の方向性を見失わせようとする『サタンの業』」（『真実を求めて』38ページ）であり、「顯進様はこれを『天宙史的葛藤』として見つめられた」（同）などと述べています。

しかし、真のお父様は、いわゆる「束草事件」のときに次のように語っておられます。

「万王の王神様（解放権）戴冠式^{ダイカンスキ}のとき、顯進が来たの、郭錠煥^{クダツファン}？ ……（十五日、そのときは行事で参加できませんでした）……重要な時間に自分が抜けたら、自分の息子、娘たちが分からないと思うの？」（マルスム選集609-127）

「十五日に韓国に来なければなりません。自分の息子、娘たちに伝授して生かすために来なければなりません。そのような重要な会議であるのに、なぜ参加しないのですか？ このようなことは話す必要がない！ 金起勳^{キムキフン}を顯進の代身として立てるのです。顯進は勉強しなければなりません」（マルスム選集609-131）

二〇〇九年一月十五日、真のお父様は「万王の王神様（解放権）戴冠式」を挙行されましたが、その式典に顯進様が参加しなかったことに対し、「なぜ参加しないのですか？ このようなことを話す必要がない」と叱責され、お父様は「金起勳を顯進の代身として立てる」ようにされたのです。お父様は、金孝律氏^{キムヒョ}に人事措置を読み上げるよう指示され、金孝律氏は「顯進様はUPF会長とGPFから一年間休み……」（同、609-1

134)というお父様の指示を述べました。

櫻井正上氏は、米国理事会のこの事件が「顯進様の暴挙として報告、お父様が激怒」され、それが「顯進様の職務停止を命じる直接的な原因」(『真実を求めて』37ページ)だったと述べますが、真のお父様は「万王の王神様(解放権)戴冠式」に顯進様が不参加だったことを叱責され、「金起勳を顯進の代身として立てる」との人事措置をされ、一年間の「職務停止」を命じておられるのです。

梁昌植氏の「二〇〇九年三月八日、束草報告書」は次のように報告しています。

「真の父母様の指示を破つて顯進様を支持した金炳和大陸会長、ブリッジポート大学総長ニール・サローネン、UTS総長タイラー・ヘンドリックス、BIA校長ヒュー・スパージョンは免職になりましたが、後で各自の悔い改めとともに父母様の特別容赦で、次々と復職して現在も仕事をしています」(26ページ)

このように、真の父母様の指示に反して顯進様を支持した理事たちは、いったんは免職となりましたが、その後、各自が悔い改めたことにより、彼らは真の父母様からの許しを受けて次々と復職しています。

しかし、顯進様は一連のことを「天宙史的葛藤」「『長子』を潰し、世界摂理を破壊(する)……『サタン業』」という恣意的な観点から見詰め、自らの「真の父母」に対する過ち、および不忠を悔い改めることもせず、真の父母様から許されなまま、真の父母様とたもとを分かつようになったのです。そして、二〇〇九年九月十日を最後に、真の父母様の前に姿さえも見せなくなり、今日に至っています。

以上のように、金鍾奭氏の『統一教会の分裂』や櫻井正上氏の『真実を求めて』は、金炳和氏が述べる「お母様の陣頭

策を立てたという。……韓鶴子は真の家庭を破壊して自殺すると創始者を脅かし……」(138ページ)

『統一教会の分裂』は、ここで、本来なら文顯進様が王冠をかぶるべきところを、真のお母様が「真の家庭を破壊して自殺する」と真のお父様を脅して文亨進様に代えさせたという話を「Wの口からこぼれた話」である、と述べています。そして、その情報元について、次のように述べます。

「二〇一六・六・二、MHの陳述(MHの自宅)。MHにこの言葉を伝えた者は、WやPと緊密な関係があったKSだという。……しかしKSは後日、MHに語ったこの陳述を否認した」(138ページの脚注)

すなわち、「Wの口からこぼれた話」とは「MHの陳述」であり、さらに「この言葉を伝えた者」は「KS」であり、この「KS」が情報元だと述べます。ところが「伝言ゲーム」のように伝わったこの内容を、情報元の「KSは後日、MHに語ったこの陳述を否認」したというのです。

金鍾奭氏は「MHの陳述」は「かなり信憑性がある」(138ページ)と強弁しますが、脚注では情報元の「KSは……否認」したと悪びれることなく述べ、結局、この内容が「根拠薄弱」なものであることを自ら暴露しているのです。

「真のお父様が」二〇〇九年一月一日未明に、文亨進ではなく文顯進が『神様解放圏戴冠式』に王冠を被るようになる」の記述や、「真の家庭と最側近の幹部はその日(一月一日未明)、麗水に集まって非常対策会議を開き、創始者の心を変える秘策を立て……韓鶴子は真の家庭を破壊して自殺すると創始者を脅かし(た)」などという「MHの陳述」は、その情報元の「KS」自身が否認しているものであり、全く根拠がありません。

指揮の下、顯進様を完全に排除する」「(『真実の前に沈黙を破つて』5ページ)という、虚偽のストーリーを描くための虚偽の証言などを、まるで真実であるかのように仕立て上げて書かれた書籍なのです。

二〇〇九年三月八日のいわゆる「束草事件」のとき、真のお父様は「カイン・アベルのUNを中心として一つとなれるここ(真の父母)が本部であつて、顯進がいるところが本部ではありません」(マルスム選集609-122)、「皆さんが今後、生きるとしても、先生の生き方と憲法(み言)を中心として、主流に従っていかなければなりません」(同)と述べて警告しておられます。

五、「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」と改竄

(1) 真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」との虚偽の記述

① 信憑性のない「MHの陳述」

『統一教会の分裂』は、「創始者(注、真のお父様)の最側近であるWの口からこぼれた話の内幕」(138ページ)であるとして、次のように記述しています。

「創始者は二〇〇九年一月一日未明に、文亨進ではなく文顯進が『神様解放圏戴冠式』に王冠を被るようになるだろうと語ったという。この言葉を受けて真の家庭と最側近の幹部はその日、麗水に集まって非常対策会議を開き、創始者の心を変える秘

②「万王の王神様解放権戴冠式」は「神様と真の父母様の戴冠式」である

二〇〇九年一月二十四日、真のお父様は「万王の王、神様何ですか? (『解放権です』) 解放権です。神様だけが解放権戴冠式であり、別の人ではありません。先生が中心ではないのです。このようなことを、こういう理論を説明するその何かがなくなつたら『解放式を先生が全てした。神様は従っていた!』と言えますが、そうではありません」(マルスム選集607-17)と語っておられます。『統一教会の分裂』は140ページで同様のみ言を引用して次のように述べています。

「創始者は、『神様王権戴冠式』……この行事は創始者の為のものではなく、誰の為の行事でもなく、『神様だけの解放圏戴冠式』だというのである」(140ページ。注、太字と圏点は教理研究院)

しかし、これはみ言の捏造です。真のお父様は「万王の王神様解放権戴冠式」は「先生が中心ではないのです」と語っておられるだけでなく、「創始者の為のものではなく、誰の為の行事でもなく」などと語ってはおりません。

二〇〇九年一月十五日、真のお父様は韓国で行われた「万王の王神様



解放権戴冠式」【前頁の写真を参照】の場で、次のように語っておられます。

「私たち夫婦が、畏れ多くも天から印を受け、神様の実体として立ち、万王の王戴冠式を執り行うこととなり、…縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真のお母様の戴冠式」(『ファミリー』二〇〇九年三月号、5～7ページ)

このように「万王の王神様解放権戴冠式」とは「万有を統治する横的万王の王、真のお母様の戴冠式」であって、「縦的万王の王であられる神様の実体」として立つておられる真のお母様の「横的万王の王」の戴冠式でもあるのです。さらに、お父様は「私たち夫婦(お父様とお母様)」が「天から印を受け、神様の実体」として立ち、執り行うとも語っておられます。

ところが『統一教会の分裂』は、真のお父様が「神様だけが解放権戴冠式であり、…先生が中心ではない」と語られたみ言の一部分をもって自分たちに都合良く解釈し、「万王の王神様解放権戴冠式」は「創始者の為のものではなく、誰の為の行事でもなく、『神様だけの解放権戴冠式』と述べているのです。これは「神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真のお母様」の宣布のみ言を恣意的にゆがめています。

③真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」と歪曲

『統一教会の分裂』は「二〇〇九年一月十五日の『神様解放権戴冠式』から九日後の二〇〇九年一月二十四日に創始者は、

「教会の分裂」のように「お母さんは、勝手にしようと思っているのです、勝手に動いてみるというのです」と訳すことはできません。「お金」に関する部分を意図的に削除し、み言を改竄しているのです。

さらに、真のお父様は「私が朝、どれほど深刻だったでしょうか」と語っておられますが、その「深刻だった」という意味についても、『統一教会の分裂』は真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」からであると述べています。これはみ言の文脈を無視し、[〃]深刻な事実〃の意味を意図的にすり替えた悪意のある記述です。

真のお父様は次のように語っておられます。

「万王の王が何をしましたか? (神様解放権戴冠式です) それは全体を話したものです。ここからひっくり返ります。皆さんは恐ろしいことが過ぎたことを知りません。先生は深刻なときなのです。ここに九番目で来て十の峠を越えたのです。十数を越えて十二数を越えて十三数です。あと三年とどれほど残ったの? 三年三百何日?」(マルスム選集60719、二〇〇九年一月二十四日)

このように、真のお父様は「先生は深刻なときなのです。ここに九番目で来て十の峠を越えた」と語っておられます。すなわち二〇〇九年一月二十四日の早朝訓読会は、一月十五日に挙行した「万王の王神様解放権戴冠式」から十日目の朝を迎えた日であり、「十の峠を越えた」ときだったのです。そのため、お父様は「十数を越えて十二数を越えて十三数」を勝利しなればならない「深刻なとき」であると言われたのです。「万王の王神様解放権戴冠式」から「ひっくり返ります。皆さんは恐

韓鶴子に底意のある話をした」(139ページ)として、真のお父様のみ言を次のように引用しています。

「お母さんは、勝手にしようと思っっているのです、勝手に動いてみるということです。お母さんはお母さんの行きたいままに行き、私は私の行きたいままに行くと言ったのです。私が朝、どれほど深刻だったでしょうか。日が昇る前に日が消える真っ暗な世界、電灯の光が砂浜に映るような、ちょうどそういう気持ちで未明から発ちました。今日は大変革を成すだろうというのです。お母さんは勝手にしろということです」(139～140ページ)

しかしこのみ言は歪曲されており、原典を忠実に翻訳すれば以下のとおりです。

「お母様に(お金を)預けましたが、お母様がしっかりと握っており、お金を自分の思いどおりに使おうと思っっているのです。思いどおりにしなさいということです。『あなたはあなたが行きたいように行き、私は私が行きたいように行く』と言ったのです。私が朝、どれほど深刻だったでしょうか。日が昇る前に、日が沈んだ暗闇の世界、電灯の明かりが砂浜に映るような、ちょうどそういう心で早朝にたったのです。今日は大変革をなすということです。お母様、思いどおりにしなさいということです」(マルスム選集60711～12、翻訳は教理研究院、以下も同じ)

このように原典に当たってみれば、真のお父様は「お母様に(お金を)預けましたが、お母様がしっかりと握っており、お金を自分の思いどおりに使おうと思っっているのです。思いどおりにしなさいということです」と語っておられるのであって、『統

ろしいことが過ぎたことを知りません。先生は深刻」と言われ、二〇一三年一月十三日の天一国基元節まで「あと三年とどれほど残ったの?」と尋ねておられるほどでした。

また、真のお父様は次のようにも語っておられます。

「深刻な場であるのに、皆さんたちは何ですか? ここ(ラスベガスの天和宮)に来て暮らす生活もそうです。お母様ならばお母様を中心に『先生がこのようにしてくださればと思います』と言いますが、私はそこに従っていかないのです。今回、神様解放権、何ですか? (戴冠式です) この意義を知らなければ大変なことになるのです」(マルスム選集60710)

このように、真のお父様は、「万王の王神様解放権戴冠式」の意義を知らなければ「大変なことになる」と語っておられ、[〃]摂理的に重要な峠〃を越えて勝利しなればならないときだったのです。

だからこそ、真のお母様が旧正月を迎えつつある天和宮での生活に対し、お父様に「このようにしてくだされば」とお願いされたとしても、お父様は「そこには従っていかない」と語られたのです。お父様は「十数を越えて十二数を越えて十三数」を越えていく「深刻なとき」であったため、お母様にお金を全て預けられて、『あなたはあなたが行きたいように行き、私は私が行きたいように行く』…お母様、思いどおりにしなさい』と全面的に許可を出しておられたのです。

『統一教会の分裂』はみ言を改竄して用い、真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」ので真のお父様は「深刻だった」というように、意味を正反対にねじ曲げ、お母様をおとしめようとしているのです。

(2) 「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」と改竄

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子だと考える内心をほのめかした」(142ページ)と述べ、次のみ言を引用しています。

「天国を開く道、真の家庭、文鮮明！ (基元節まで) 四年数か月残っています。このときまでお母様が責任を果たせる度数を終えることができなければ、問題が起こるのです。そのために、大事に無事に私が責任を全て築いておいたので、これまでしたので、お母様も、私が悔しいと当たり散らしたりせず、拳を挙げて殴ったりしない限り全てが解決されます」(二〇一年「真の父母様ご聖誕日記念出版」版のマルスム選集607-310、翻訳は教理研究院)

金鍾奭氏は『統一教会の分裂』で、真のお父様が「お母様も、私が悔しいと当たり散らしたりせず、拳を挙げて殴ったりしない限り全てが解決」されると語られたみ言を用いて、「創始者が悔しいと自分の拳で韓鶴子を打たない以上、基元節は成功するという言葉」(143ページ)であると歪曲し、しかも、「私」という人称代名詞を「創始者」に置き換えています。これはみ言の改竄です。このように置き換えるのは、このみ言がお父様の「苦しい心情を吐露した」(同)ものであると読者に読ませたいためです。

しかし、全体の文脈から見て、この「私」という人称代名詞は「創始者」ではなく、「お母様」自身を指しています。すなわち、「私(真のお母様)」が悔しいと当たり散らしたりせず、

しかし、これもみ言を改竄したものです。
マルスム選集608巻には、次のようにあります。

「原理を解釈すらできない人々が、先生が純血か、何の血か。私はそれを知っているので、この場に来ないようにしようと思いました。そこに行かないようにしようと思いましたが、汚らわしいことを知っているのか。何、先生の血がどうだというのか、墮落前に血を汚したのか」(マルスム選集608-289、二〇〇九年二月二十八日。注、傍線部分は教理研究院による翻訳で、『統一教会の分裂』が削除している部分)

このように『統一教会の分裂』は、み言の傍線部分を、意図的に削除し、改竄しています。

真のお父様は「原理を解釈すらできない人々」が「先生が純血か、何の血か」などと言っていることを知っておられるので「この場に来ないようにしよう」と思われたと語っておられます。すなわち、「原理を解釈すらできない人々」とは真のお母様のことではなく、「この場」に集まった食口たちのことを指しているのです。

したがって、お母様が「先生が純血か、何の血か」などと「創始者の血統に対して問題を提起」し「創始者の血統を疑っている」(110ページ)のではなく、お父様が「韓鶴子との葛藤を暗示」したものでありません。

また、『統一教会の分裂』の148ページで引用しているみ言は、同書109、110ページにも記載されており、金鍾奭氏は次のように述べています。

「二〇〇八、二、二十八..創始者は韓鶴子との葛藤を暗示しながら、誰かが創始者の血統的アイデンティティを否定している

拳を挙げたり殴ったりしない限り」全てが解決でき、「お母様が責任を果たせる度数を終える」ことができるように、真のお父様は「責任を全て築いておいた」と言われているのです。よって、このみ言は、お父様の「苦しい心情を吐露」したみ言ではありません。

また、このみ言は『統一教会の分裂』の226ページと249、250ページなどにも掲載されており、このみ言が「韓鶴子について創始者が否定的に言及した内容」(226ページ)と述べ、かつ「韓鶴子の不従順」(245ページ)に関するみ言であるとして、随所に引用しています。

ところが、このみ言は、基元節まで真のお母様が責任を果たすことができるように、真のお父様が「責任を全て築いておいた」という「愛のみ言」であって、「苦しい心情を吐露」されたものなどではないのです。

(3) 「韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」と改竄

『統一教会の分裂』では、二〇〇九年二月二十八日の早朝訓読会で「創始者は、韓鶴子との葛藤を暗示する言及をした」(148ページ)と述べており、次のみ言を引用しています。

「お母さんも三十八度線を越えなければならない。あなたはあなたが行くべき道があり、私は私なりに行く道があると言って行ってみなさい。……『先生が墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたか』などと言っている。……原理を解釈すらできない人々が、先生が純血か、何の血か、先生の血がどうだというのか、墮落前に血を汚したのか」(148ページ)

ことに言及した。……二〇〇八年二月に創始者にこの話をする
ことができる人は唯一人、韓鶴子しかない」(109、110ページ)

このように『統一教会の分裂』は、二〇〇九年二月二十八日に語られたみ言を、二〇〇八年二月二十八日に語られたみ言であると日付を捏造し、真のお母様が「創始者の血統的アイデンティティを否定」なさるなどという、ありもしないストーリーを記載しているのです。

さらに、250ページにも二〇〇九年二月二十八日のみ言を記載しており、「韓鶴子の不従順」(245ページ)を裏づけるみ言の一つであるとしています。

すでに教理研究院はこのみ言について「反論済み」ですが、再度、以下に主な内容を要約します。真のお父様は二〇〇九年二月二十八日に次のように語っておられます。

「私」が神様の代身として純潔、純血、純愛の表象となつて鏡とならねばならないのに、(皆さんは)そのような鏡になっていますか?……『先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか?』というのです。皆さんは、そのように言う(注、純血のこと)自信がありますか?……原理を解釈することもできない人々が、何、先生は純血か、何の血か。私はそれを知っているのです、この場に来ないようにしようと思いました。そこに行かないようにしようと思いましたが、汚らわしいことを知っているので。何、先生の血が、どうしたのですか。墮落の前に、血を汚しましたか?……数多くの女たちが私をゴロツキにしようと、墮落させようとするので、(私は)鍵を掛けて暮らしました。お母様に尋ねてみてください。……うちの

家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ちうる孫娘がいつ生まれるか？それが私の心配なのです。七代を経て難しいだろうと考えるのです」(マルスム選集608-288-292)

このみ言は、韓国のパインリッジリゾートの天情苑で、朝の訓読会のように語られたのですが、真のお母様に對して語られたものではなく、その場に参席した食口たちに対して語っておられるものです。

ここで、真のお父様は『平和神経』について語られながら、食口が「神様の代身として純潔、純血、純愛の表象となつて鏡」とならなければならないのに、「そのような鏡になっていますか？」と尋ねておられます。その流れの中で、『先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？』というのですと語っておられるのは、『平和神経』を中心とした「純潔、純血」に関する話であり、「先生は……」という言葉で分かるように、これは、真のお母様が「創始者の血統に対して問題を提起した」ことに対する、お父様の「葛藤を暗示する言及」などではなく、食口たちがそのように言っている言葉として述べておられるのです。

つまり、食口の中で「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？」などと語っており「六マリヤ」のようなことがあると思っているようだが、そんな事実はなく、「皆さんは、そのように言う（注、純血のこと）自信がありますか？」と述べられ、「原理を解釈することもできない人々が、何、先生は純血か、何の血か」と言っているが、それはとんでもない話であると語っておられるのです。

続けて真のお父様は、「数多くの女たちが私をゴロツキにしよう、墮落させようとするので、（私は）鍵を掛けて暮らし

收拾する道理がありません。お母さんも絶対信仰・絶対愛・絶対服従です。自分を中心としたお父様への絶対信仰・絶対愛・絶対服従ではありません。その時までお母さんは絶対について来なければならぬということです。〈中略〉ここにいるお母様が自分の考えを持って巣をつくるようになれば、問題が大きいということです。〈中略〉今、完成時代に入って、お母さんが責任を果たせなければお母さんの後継者はいくらでもいっばいいるのです」(246ページ)

『統一教会の分裂』は、この内容は「創始者（注、真のお父様）を不信する韓鶴子の態度」(245ページ)に言及したみ言であると述べます。しかし、これはみ言の歪曲です。

ここで語られている「お母さんが責任を果たせなければお母さんの後継者はいくらでもいっばいいるのです」という内容は、その当時の母の国、日本について触れているものです。『統一教会の分裂』は、上記に続く重要な部分を削除し、隠蔽しています。真のお父様は、み言を続けて次のように語っておられるのです。

「それで、最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤なのです」(マルスム選集312-177。翻訳は教理研究院、以下同じ)

『統一教会の分裂』は、「創始者を不信する韓鶴子の態度」が事実であるかのように印象づけるために、真のお父様が苦慮しておられたかのようにみ言を恣意的に引用し、「それで、最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤なのです」という総括的なみ言の部分は削除し、自分たちに都合

ました。お母様に尋ねてみてください」と語っておられます。

つまり、お父様がいかげんに生きておられることなどないという事実の証人は、真のお母様であられ、そういう意味で「お母様に尋ねてみてください」と語っておられるのです。お父様の証人となられるお母様が、「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？」とお父様に対して疑って質問することはありえない話です。もし、お母様がお父様を疑っておられるという話であるなら、「お母様が証人である」と、お父様が語られることはありません。

そして、真のお父様は「うちの家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ちうる孫娘がいつ生まれるか？それが私の心配なのです。七代を経て難しいだろうと考えるのです」と語られ、真のお母様を証ししておられます。

すなわち、お母様ほどの女性は何代を経ても現れないくらいに、お母様は素晴らしい方だと証ししておられるのです。

六、サタンは真の子女様を狙っている

—— 真のお父様の預言

(1) 「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言は存在しない

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に苦慮しているみ言であるとして、次のようにみ言を引用しています。

「エバがこのようなことを知っていたら復帰されていたのにといいのです。今、お母さんが一人で出てきたらどうしますか。

良く解釈し記述しているのです。

まず、『統一教会の分裂』が、意図的に隠蔽した「最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤」と語られた「父母様の賞」とは何であるのかを明確にしておかなければなりません。

一九九九年六月十四日(天曆五月一日)、真のお父様は「真の父母様宇宙勝利祝賀宣布」の式典で、真のお母様に「表彰牌」を授与されました。お父様が語っておられる「父母様の賞」とは、その「表彰牌」のことです。お父様は、そのときの式典で次のように語っておられます。

「八十か都市で勝利の基準を持って帰ってきたので、お母様はついに、お母様としての責任を果たして、神様が公認される位置に、サタンが公認する位置に、真の父母と人類が公認する位置に立ち、キリスト教人口の氏族圏を超えた勝利の版図圏に立ったのです。……文総裁からお母様に対して、韓鶴子女史に対して表彰をします。今からは、対等な立場なのです」(『ファミリー』一九九九年八月号、20ページ。太字ゴシックは教理研究院)

真のお母様は、一九九九年に「真の家庭世界化前進大会」で講演され、「八十か都市で勝利の基準」を立てられました。それに対し、真のお父様は「お母様としての責任を果たして……真の父母と人類が公認する位置」に立たれたと語られ、お母様に「表彰牌」を授与されたのです。

その「表彰牌」には、「あなた(真のお母様)は……蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利し、永遠の伝統を立てられました」(『真の父母経』1440ページ)と

刻まれています。

「真の父母様天宙勝利祝賀宣布」は、お母様が「蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利」したことを天と人類の前に宣布し、祝賀した式典でした。

『統一教会の分裂』が引用した一九九九年十月十五日の^{ことば}み言は、真のお父様が「韓鶴子^{ハンハクチャ}の不従順」に対する「創始者の苦心」（246ページ）を語られたものではなく、真のお母様に授与された表彰牌が、「蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利」されたものであり、「真の父母と人類が公認する位置」に立つ「決定的基盤」となっていることを証^{あかし}ししておられるものです。

（2）『統一教会の分裂』が隠蔽^{いんぺい}しているみ言

①真のお父様は「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげた」

一九九九年十月十五日のみ言には、真の父母様のご家庭に起こりうる、さまざまな問題を預言的に語っておられる内容があります。以下、引用します。

「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげたのです。それで、ありとあらゆることが、全部起こったのです。（かつて）孝進^{ヒョジン}を見てみれば、（金）孝律^{ヒョル}のほおを殴り、あの野郎、みんな殺すと。全部みんな、息子たちがそうです。……（今後）^{ヒョジン}顯進や國進^{クンジン}までも、こじきみたいなやつたちを殴り殺さなければならぬということです。……（しかし）それが自分の心ではないのです」（マルスム選集312-179）

「父母様に反対し、父母様でも何でも、すべてなくしてしまおう」と「われ知らずそのような思いが出てくる」ことがあったと述べておられます。

真の子女様の心に、互いに「殺したい思い」が出たり、「父母様に反対」する思いになったりするのは「自分の心」ではなく、「われ知らずそのような思いが出てくる」からだと言われました。だからこそ、真のお父様は子女様に対し「お母様の言葉に絶対服従しなければなりません」と忠告しておられるのです。これは子女様をサタンから守るためです。

また、真のお父様は一九九九年十月十五日のみ言で、次のようにも語っておられます。

「み旨のためにいちばん近い側近者が（真の父母様を）背信します。先生の息子の中にも、背信した者が出てくるのです。先生を殺そうと、売り飛ばそうというのです。……先生の息子、娘が祝福を受けたことを、離婚して一緒に住めないということまで出てくることを心配しているのです。……サタンが神様を通過して、神様の体まで、アダム、エバの体まで侵犯したので、その後孫の復帰時代に、その居間にまで入ってきて傷をつけるというのです。それが最後です」（マルスム選集312-180）

真のお父様は「先生の息子の中にも、背信した者が出てくる……離婚して一緒に住めないということまで出てくる」と語られ、真の子女様に今後、起こりうるさまざまな問題について言及されました。

このように、真のお父様が「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾」をされたので、サタンの讒訴^{ざんそ}条件が残っていれば、サタンが真の子女様を狙って、真の父母様のご家庭の「居

さらに、真のお父様は、文孝進様の聖和後、二〇〇四年四月六日の第四十九回「真の父母の日」に、ハワイで「真の母およびカイン・アベル一体化の特別式」を挙行され、ご自分の前に文顯進様と文國進様を立たせ【写真を参照】、次のように語っておられます。

「あなたたちカインとアベルが、お母様の言葉に絶対服従しなければなりません。……あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。……われ知らず憎みます。声を聞くのも嫌で、歩いていくのを見れば、後からついていって殺したい思いが出てきます。あなたたちに、われ知らずそのような思いが出てくるということです。かつて孝進がそれを体験し、いけないということを知っているので、兄弟たちに接することができず、父母様に反対し、父母様でも何でも、すべてなくしてしまおうと考えたということです」（『ファミリー』二〇〇八年六月号、30ページ）



「真の母およびカイン・アベル一体化の特別式」
(2008年4月6日、米国・ハワイ)

このように、真のお父様は、顯進様と國進様に対して、兄弟同士が「われ知らず憎みます。声を聞くのも嫌で……殺したい思いが出てきます。あなたたちに、われ知らずそのような思いが出てくる」と語られました。かつて孝進様もそのような思いを体験され、

間にまで入ってきて傷をつける」事件が起こりうるということです。

②サタンが「居間にまで入ってきて傷をつける」事件

一九九九年十月二十七日、六男の文榮進^{ムンヨンジン}様がホテルのバルコニーから転落し、聖和されました。それは、真のお父様が「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげた」と語られた日から十三日目の出来事であり、サタンが真の父母様の家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」と語られた後に起こった最初の事件でした。

真のお父様は、榮進様の聖和について次のように語っておられます。

「父母が、カイン世界を救うために犠牲になったのと同じように、興進^{フンジン}君と靈界に行っている四人の子女たち（喜進^{ヒジン}様、恵進^{ヘジン}様、興進^{フンジン}様、榮進^{ヨンジン}様）は、皆、自分の持つて生まれた寿命を全うできずに、途中で急死した人たちです。皆、事故死です」（『ファミリー』二〇〇一年二月号、17ページ）

真のお父様が「霊界に行っている四人の子女たちは、皆……事故死です」と語っておられ、榮進様の聖和は「事故死」によるものだったのです。さらに、お父様は次のように語っておられます。

「榮進が家を出るとき、勉強すると手紙を書いておいて行きました。自分の複雑な環境から新たに決心して、勉強するという手紙を書いておいて行きました。ラスベガスにいて、ネバダに行つてその都市の名前は何か？（「リノです」）リノのハ

ライズホテル十七階二三号室で事故に遭ったのです。それを自殺と見ることはできません。事故と見るのです」(マルスム選集312-237、238、一九九九年十一月二日)

榮進様は、「自分の複雑な環境から新たに決心して、勉強するという手紙」を書いて家を出発されました。真のお父様は、新たな決心をして出発された榮進様は「事故に遭った」と語っておられます。

そして、真のお父様は霊界の実相からも、榮進様の死が「事故」であることを次のように語っておられます。

「霊界の実相を知れば、霊界では、自殺した人が入っていくと、神様のみ旨の前に出て協助することはできません。涙を流しながら『わたしの責任を果たせる兄弟たちを助けてほしい』と祈禱し、父に対してその事情を語る榮進、その息子を見ると、



文榮進様の世界聖和式

これは自殺ではありません。自殺ではないのです。自殺した者は先生の前に現れることができません」(『ファミリー』二〇〇九年九月号、7ページ。太字ゴシックは教理研究院)

そして、真のお父様は、四人の真の子女様たちの「事故死」の原因について次のように語っておられます。

「事故が起きたのですが、だれ

正に、そのときの母の国、日本は、真のお父様が「お母さんが責任を果たせなければお母さんの後継者はいくらでもいっぱいいる」と語られたように、他の国(カナダ、フィリピンなど)に母の国の使命を譲らざるをえない状況に陥っていたのです。

結局、真のお父様のご入国問題は解決されず、三億六千万双の祝福式は日本で開催することができませんでした。お父様が「母の国の立場を失い、めちゃくちゃになってしまう」と語られたように、母の国、日本は「間違った環境」をつくり、サタンに讒訴条件を握られてしまったのです。そのため、お父様は、「それで、最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤なのです」と語られ、今後、サタンが「(真のご家庭の)居間にまで入ってきて傷をつける」事件が起こることがあったとしても、真のお母様に授与された「賞」が「決定的基盤」となっている事実を明らかにされ、日本および真の子女様たちが真のお母様、そして真の父母様にしっかりつながっていないければならぬことを語っておられたのです。

同年八月一日には、真のお父様は日本人国家メシヤに対し、「全員オリンポに集合」(同)しなさいと指示され、百二十人が集まって四十日修練会が開催されました。その修練会の最後の頃、お父様は「全員ここに残れ。もう日本に帰る必要はない」(同)と、日本に対する深刻な思いで国家メシヤたちに語られました。

そのような中で、一九九九年十月二十七日、榮進様がホテルのバルコニーから転落する「事故が起きた」のです。この事故は「間違った環境」のゆえにサタンが讒訴し、真の父母様のご家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」出来事だったのです。私たちは、一九九九年当時、日本で祝福式を挙行できなかったために榮進様の犠牲があった悲しみの歴史を知って、「神様

が運転していたのか」と、自分たちではなく、皆さん(食口)が間違った環境をつくり、皆さんが間違った運転をし、皆さんによって、そのような事故が起きたということを知らなければなりません。……神様と真の父母様に重荷を負わせたという恥ずかしい事実を知らなければなりません」(『ファミリー』二〇〇一年二月号、17、18ページ)

このように、真のお父様は、榮進様の「事故死」は「皆さん(食口)が間違った環境をつくり、皆さんが間違った運転をし、皆さんによって、そのような事故が起きた」のだと語られました。すなわち、真の子女様に対し、カイン圏の食口たちが「間違った環境」をつくることで、「先生の家庭までも、サタンが侵犯」できる条件となり、榮進様の転落事故という胸痛い事件が起きたのです。

実は、榮進様が事故に遭われた内的原因は、母の国である日本にもありました。

一九九九年、真のお父様は二〇〇〇年までに摂理を完結させるための最後の一年として、三億六千万双の祝福式を日本で挙行される計画をお持ちであり、当時の会長はお父様から、日本に「入国できるように政府と交渉」(『世界家庭』二〇一六年九月号、75ページ)するようという願いを受けていたのです。

一九九九年一月一日、「神の日」の式典が南米で行われ、引き続き会議があり、真のお父様は日本の会長(当時)に「先生が入国できるように政府と交渉ができたのか」(同)と確認されました。会長が「申し訳ありません。まだできていません」と答えると、お父様は深刻になられ、「先生を入国させなければ、日本は母の国の立場を失い、めちゃくちゃになってしまう」(同)と厳しく言及されたのです。

と真の父母様に重荷を負わせた」ことを深く悔い改めなければなりません。

③希望の預言、「春が来れば、みんな解ける」

現在、顯進様、國進様、亨進様は真の父母様の主管圏から離れ、非原理的活動を行っています。真のお父様はこのような状況になることを、すでに一九九九年十月十五日の一言で「先生の息子の中にも背信した者が出てくる」と預言しておられたのです。しかし、お父様は次のように語っておられます。

「顯進や國進までも、こじきみ、たいなやつたちを殴り殺さなければならぬということです。盗賊野郎のやつら、全部みんな信じることができないということです。そのようなものです。(しかし)それが自分の心ではないのです。峠を越えるようになれば、春が来れば、みんな解けるようになります。それは神様の愛と、父母様の愛の、春の季節を迎えることによって解けるのであって、その前に父母様と神様がカインを救うための、カイン(のための)愛の時代でしょう? ……ありがたいことは、サタンが先生の息子、娘をむやみに拉致できません。ありとあらゆるうわさはみんな出したけれども、(息子、娘を)捕まえて殺すことができません」(マルスム選集312-1179、180)

真のお父様は、サタンの讒訴ゆえに真の子女様に関するさまざまな問題が起きたとしても、「峠を越えるようになれば、春が来れば、みんな解けるようになります」と語られました。すなわち「父母様と神様がカインを救うための……愛の時代」を

超えてこそ、春が来て、みんな解けるようになることを言及しておられるのです。

また、一九九八年九月二十一日、真のお父様は次のように語っておられます。

「国家メシヤたちには高級な服を買ってあげながら、自分の子女たちを連れて行つて（そのような）服を買ってあげたことは一度もありません。……（カイン圏の）外的な世界の人たちに愛を与えていたら、自分の家族が悲惨になってしまいました。

先生はどのように考えるかというと、『愛の祭壇を世界化させる仕事を私がする』と考えるのです。……祭物を捧げる時には、家庭祭物を捧げなければなりません。父母様が祭物にならなければなりません。父母様自身が、食口シヅ自身が、祭物にならなければならないのです。一番近いところから、神様は復帰摂理の祭物としてこられたではないですか！

統一教会員たちはそれを知っているのです、自分（お父様）の背に乗って越えていかなければなりませんでしたし、踏んで越えていかなければならないと考えるのです。……祭物なのです。……全世界の祭物なので、全世界の人類が、その祭壇の前で（頭を下げ）敬礼を捧げなければならないのです。

御旨がすべてなされた後……私たちの家庭を、世界の家庭がどれくらい尊敬するか、考えてみてください。償わなければなりません。全人類が、全世界が、私たちの家庭に感謝する日が来るということを（今は、皆さんは）知りません。……

五十年の歴史を過ごしながら、すべて悲しみで埋められているので、それを越えて来ることでできない環境にあるのが、先生の家庭であることを知らなければなりません。家庭的祭壇を積んで摂理してきたことを知らなければなりません」（『祝福家

ジョン二〇二〇勝利のために死生決断で歩んでおられます。お母様は同年十二月九日、次のように語っておられます。

「私たちに中断はありません。前進があるのみです。全世界の真の家庭の皆さんが、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって新（神）氏族のメシヤの使命を果たし、天の大いなる恩賜と天運を相続する勝利者になることをお祈りいたします。天は、私たちに途方もない祝福を下さいました。その責任は、必ず私たちが、皆さんが、二世たちが完成しなければなりません」（天一国経典『天聖經』1368ページ）

真のお母様は、「カイン（世界）を救う」ために、全世界の祝福家庭が「絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって新（神）氏族のメシヤの使命を果たし、……勝利者になること」を願われ、中断なき前進を訴えておられます。お母様は「二〇二〇年まで、この国の復帰と世界の復帰のために……心を一つにし、志を一つにして、この目的を達成」（『真の父母経』572ページ）しなければならぬと語られ、「新（神）氏族のメシヤ」の勝利を何度も強調しておられるのです。

また、真のお母様は、二〇一四年二月九日、次のように語っておられます。

「二〇二〇年まで、私（お母様）が天のみに約束したことがあります。それが必ず成就するよう、多方面で環境創造をするつもりです」（同、1065ページ）

このように、真のお母様は「二〇二〇年まで、私（お母様）が天のみに約束した」ことを果たすため、『環境創造』をしていき、天の父母様（神様）の旨を必ず成就する決意で歩ま

庭』一九九八年冬季号、25～26ページ）

真の父母様は、「カイン（世界）を救うため」に、より近い真の子女様を犠牲にしながら「（カイン圏の）外的な世界の人たちに愛を与えて」こられました。真のお父様が「五十年の歴史を過ごしながら、すべて悲しみで埋められている……先生の家庭である」と語られたように、真の父母様は最も愛する子女様を犠牲の祭物として捧げながら、『**家庭的祭壇を積んで摂理**』を導いてこられたのです。

今日における真の子女様の非原理的行動は、食口の不足歩みによって生じた結果なのであり、『サタンが侵犯』し、真の父母様のご家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」ことが起こりうる讒訴条件によるものです。正に、サタンが子女様を拉致して悪事を働こうとしている姿だと言えるのです。しかし、サタンは子女様を「捕まえて殺すこと」はできません。私たちは真の父母様を「踏んで越えていかなければならない」み旨の道において、今までの私たちの不足、サタンの讒訴圏を清算すること、子女様を本来の位置に取り戻してこなければならぬのです。

真のお父様は「御旨がすべてなされた後……全人類が、全世界が、私たちの家庭に感謝する日が来る」と語っておられます。すなわち、最後の「峠を越えるようになれば、**春が来れば、みんな解ける**」ようになり、真の父母様のご家庭は、全世界の人々から愛され尊敬されるようになるということです。そうしてこそ、『**家庭的祭壇を積んで摂理して**』こられた真の父母様の『恨』が解かれるのです。

二〇一二年天曆七月十七日（陽曆九月三日）、真のお父様が聖和された後、真のお母様は、**中断なき前進**を宣布され、ビ

れています。

私たちはそのような真のお母様と「心を一つにし、志を一つ」にして、『新（神）氏族のメシヤの使命』を果たさなければなりません。そして、一九九九年に三億六千万双の祝福式を日本で開催できなかった真のお父様の『恨』を、二〇二〇年までの最後の年に解いてさしあげなければなりません。

真のお父様が「峠を越えるようになれば、**春が来れば、みんな解けるようになります**」と語っておられるように、正に今が摂理的春が近づいている「峠を越える」ときののです。

一九九九年十月十五日の**み言**は、真のお母様の心情、事情、願いと一つになって、祝福家庭が「**新（神）氏族のメシヤの使命**」を果たし、摂理的な春を迎えるようになれば、真の子女様の問題は全て「みんな解ける」という、希望のみ言、預言の内容なのです。

このように『統一教会の分裂』は、一九九九年十月十五日のみ言が「**韓鶴子の不従順**」を裏づけするものと記しています。しかし、そのみ言を検証してみると、真のお母様が「**絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利**」されたというみ言や「**息子の中にも、背信した者が出てくる**」という真の子女様に関する預言の部分、そして「**春が来れば、みんな解ける**」という希望のみ言など、貴重な内容が隠蔽いんぺいされているのです。

七、存在しない「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言

——偽りに満ちたみ言引用

（一）二〇〇二年一月二十三日のみ言の偽った解釈

①今後、越えるべき「二つの峠」のみ言

『統一教会の分裂』は246ページで、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対して苦心しているとして、二〇〇二年一月二十三日のみ言を次のように引用しています。

「今、一番残ったものは何でしょうか。経済問題です。お金の問題、その次に息子の問題です。お母さんが経済問題、世界を失い、息子を失ったでしょう。そこに引かなかったのです。新郎、夫、アダムを追い出して最後の位置に行くと、その問題に引かかります。お金の問題、息子の問題！ 自分のお金を別に用意するというのです、息子の為に。ダメです。それが問題になるのです。お母さんが今行くべき道を私は全て教えてあげるのです。今、天一国になったので教えてもかまいません。お金、物質と息子を中心にお父さんから放れるのか。それを捨ててもお父さんに従って行くのか。どうすればいいですか。どうしなければなりませんか。『お父様についていかなければなりません』お父さんに従って行かなければなりません。お金がお金で問題ではありません。息子が問題ではありません。お母さんの責任が何かというと、それです。お金を主管して、息子を主管して夫の前に捧げなければなりません」（マルスム選集3671264）

『統一教会の分裂』は、このみ言が「創始者を不信する韓鶴子の態度」を裏づけるものであるとしています。しかし、これは根拠のない偽りの主張です。それを裏づける証拠に『統一教会の分裂』は、み言の一部分を隠蔽し、意味を改竄しているの

が引用した「今、一番残ったものは何でしょうか……」が続くのです。

このみ言は、真のお母様が今後、越えて勝利しなければならぬ、「二つの峠」について説明しているみ言です。その「二つの峠」とは、「お金の問題、息子の問題」であるということです。すなわち、克服すべき経済問題があり、整理しなければならぬ息子の問題が残っているということです。真のお父様は、「先生がいなくなる時には、お母様が責任を負わなければならぬ」とい

ため、この「二つの峠」について触れておられるのです。このみ言は、真のお父様の聖和後、真のお母様が直面するであろう問題について、前もって教えておられた「預言のみ言」であると言えます。

ところが『統一教会の分裂』は、「創始者を不信する韓鶴子の態度」という「虚偽のストーリー」を描くため、直前の部分を意図的に削除しているのです。

また、真のお父様は続いて、次のように語っておられます。

「お母さんが今行くべき道を私は全て教えてあげるのです。今、天一国になったので教えてもかまいません。お金、物質と息子を中心にお父さんから放れるのか。それを捨ててもお父さんに従って行くのか。どうすればいいですか。どうしなければなりませんか。『お父様についていかなければなりません』お父さんに従って行かなければなりません。お金がお金で問題ではありません。息子が問題ではありません。お母さんの責任が何かというと、それです。お金を主管して、息子を主管して夫の前に捧げなければなりません。どころが、この世の女性たちはお金を全て持って……」（録音がしばらく中断される）（マルスム選集3671264、「傍線部」は教理研究院の翻訳）

です。

隠蔽された真のお父様のみ言は、引用された箇所前の部分で、次のように語っておられます。

「蕩滅時代には父母様が難しいことを独り（真のお父様）で直面するのであって、……お母様も今は知らないのです、先生が先頭に立って何をしているのか。それを教えてあげると、苦痛と一緒に受けなければならぬでしょう？ いつもそのように考えてはいけません。最後には、自分が同参しなければなりません。先生が責任を負ったのは、世界的ですが、先生がいなくなる時には、お母様が責任を負わなければならぬのです。……だから絶対に引かかるといいます。……今からは二つの峠しか残っていないのです。それをお母様は（今は）知りません。それが何であるか知らないのです。今、一番残ったものは何でしょうか。経済問題です。お金の問題、その次に息子の問題です」（マルスム選集36712631264、網掛け部分の翻訳は、教理研究院）

『統一教会の分裂』は、上述のみ言を、後ろから3行目の「今、一番残ったものは……」から引用しています。その前の部分で、真のお父様は、「先頭に立って何をしているのか」を真のお母様に教えるならば、お母様が「苦痛と一緒に受けなければならぬ」とい

ために、「蕩滅時代には父母様が難しいことを独り（お父様）」で直面しながら解決してきたと語っておられます。

これは、お父様のお母様に対する愛のみ言です。そして「最後には、……お母様が責任を負わなければならぬ……二つの峠」があり、それが何であるのかを「お母様は（今は）知りません」と語っておられます。そのみ言の後に、『統一教会の分裂』

真のお父様は、今後、真のお母様が越えていくべき「二つの峠」は「お金を主管して、息子を主管して夫の前に」捧げることであると語っておられます。そして、「ところが、この世の女性たちはお金を全て持って……」と語っておられるように、「この世の女性たち」は「お金、物質と息子を中心に」お父さんから離れるということです。しかし、真のお母様は、そのような問題に対し「絶対に引かかぬ」ことなく、お父様と一つとなって勝利しなければならないと述べておられるのが、このみ言の意味なのです。

②「二つの峠」を越えるため、母の責任を果たされた真のお母様

前述のように、二〇〇二年一月二十三日、真のお父様は「二つの峠」について、次のように語っておられます。

「最後には、自分（真のお母様）が同参しなければなりません。先生が責任を負ったのは、世界的ですが、先生がいなくなる時には、お母様が責任を負わなければならぬのです。……お母様の責任が何かというと、それです。お金を主管し、息子（二世）を主管して夫（天）の前に捧げなければなりません」（マルスム選集36712631264）

真のお父様が「先生がいなくなる時には、お母様が責任を負わなければならぬ」と語られたように、真のお母様は、お父様の聖和後、「最後には、自分（お母様）が同参」して勝利されなければなりません。それは「二つの峠」を越えていくこと、すなわち「お金を主管し、息子を主管して夫（天）の前に」

捧げることです。

真のお父様は、二〇一三年天暦一月十三日を「基元節」、すなわち実体的天一国の出発であり、起源となる日と定められ、死生決断・全力投球の歩みをされました。そのような中、お父様は二〇一二年天暦七月十七日（陽暦九月三日）に聖和されましたが、真のお母様はお父様のご意向を受け継がれ、「基元節」勝利のために歩まれました。

二〇一二年九月十七日に「『基元節』勝利のための統一教会世界指導者特別集会」が開催され、真のお母様は次のように語っておられます。

「真のお父様は今、霊界で私たちといつも共にいらつしやいます。ただ無形でいらつしやるだけであり、一瞬たりとも私たちの傍らを離れることはないでしょう。今私たちに何を望んでいらつしやるでしょうか。正に中断のない前進です」（『平和経』352ページ）

また、二〇一二年九月三十日には次のように語っておられます。

「私たちは二世を天の前に捧げることができませんでした。これは誰の責任でしょうか。父母として、この時代の責任を負った者として恥ずかしいことです。

ですから、私はお父様に了解を求めました。お父様がお乗りになっていたヘリコプターを売る計画です。私が使わなければ、誰も使う人がいません。……ですから、お父様に報告したのです。私はこれ売って、後代のための指導者を養成し、二世を養育する目的の奨学金として全世界的に使おうと思うと申し上げました。すると、『オンマの思うとおりにしなさい』とおつ

です。そうです。今まで世間に染まっています。そうだからと言って、他の人の家庭とするというものではありません。愛し続けることができないというのです。きれいに清算して、再び愛さなければならぬというのです」（マルスム選集433-139、『統一教会の分裂』246-247ページ）

『統一教会の分裂』は、「先生がこれからはお母さんとは別れて、再び結婚の準備をしなければならない」と訳していますが、これは誤った訳です。正しくは「先生がこれからはお母様と**分かれて**、再び結婚の準備をしなければならない」になります。「離婚」を意味する「別れて」と翻訳することはできません。これは「創始者が韓鶴子に対する残念な感情」を持つているのかのように描くために、あえて「別れて」と翻訳しているものです。これは「聖別」を意味する「分かれる」と訳すべきものなのです。真のお父様は、次のように語っておられます。

「神様の祖国と平和王国時代を宣布したその上に存在する前には、神様の祖国の所有物になれる、なれない？（「なれません！」）それを考えなければなりません。だから、待つのは天一国十二年までです」（マルスム選集433-137、二〇〇四年一月二十六日）

真のお父様は、二〇一三年天暦一月十三日を「天一国」の起源となる日、すなわち「基元節」として定められ、その日には三度目の完成的「真の父母様の結婚式」（『トゥデイズ・ワールドジャーナル』二〇一一年天暦九月号、13ページ）を執り行うと語られました。

二〇〇四年一月二十六日、「先生がこれからはお母様と分か

しやいました」（『韓鶴子総裁御言選集1・真の父母様を中心とした一つの世界』212ページ、成和出版社）

また、二〇一三年二月二十日、「圓母平愛財団」出帆式で次のように語っておられます。

「私は『圓母平愛財団』をより一層大きく発展させるでしょう。その第一次として、お父様の聖和基金の全額を資金として入れました。ヘリコプターが売却できれば、それも資金にするつもりです」（『韓鶴子総裁御言選集3・天一国と私たちの使命』126ページ、成和出版社）

二〇〇二年一月二十三日に真のお父様が「先生がいなくなる、ときには、お母様が責任を負わなければならないのです。……お母様の責任が何かというと、それです。お金を主管し、息子（二世）を主管して夫（天）の前に捧げなければなりません」と語っておられた「二つの峠」を越えるための「母としての責任」を果たされ、二〇一三年天暦一月十三日、「基元節」を勝利していかれたのです。

（2）二〇〇四年一月二十六日のみ言の虚偽の解釈

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対して苦心しておられるみ言であるとして、二〇〇四年一月二十六日のみ言を引用します。

「ここにお母さんもおられますが、先生がこれからはお母さんとは別れて、再び結婚の準備をしなければならないというの

れて、再び結婚の準備」をされると語られたその意味は、二〇一三年天暦一月十三日に行う予定の三度目の完成的「真の父母様の結婚式」のことです。それで、真のお父様は「待つのは天一国十二年まで」と語られたのです。したがって、『統一教会の分裂』が「先生がこれからはお母さんとは別れて」と訳すのは、悪意のある翻訳です。

また、「今まで世間に染まっています」というみ言は、真のお母様のことではなく、祝福家庭のことについて語られたものです。このことについて真のお父様は二〇〇四年一月二十六日の同じみ言で、次のように語っておられます。

「皆さんの血族という父母や全ては野生のオリーブの木なのです。……この世の全てのものは（そのままで）私と関係を結ぶことができないのです。なぜですか？ 彼らは真の父母と関係がないからです！ 関係があるようにするには、神様の愛の怨讐である姦夫の血統を受けた後継者であるので、これを完全否定しなければなりません。そうでなければ、神様の祖国と平和王国時代に生きる存在になれないのです。……皆さんが同じ家でそのような（野生のオリーブの木である）母を持つており、父を持つており、兄弟を持つているというのはありえない事実だということを知らなければなりません。……今年にはこのことを整備しなければなりません。同じ部屋で一緒に彼らと息を吸い、ご飯を食べているのです。それを清算してしまわなければなりません。泣こうが、何をしようが、切って接ぎ木しなければならぬのです」（マルスム選集433-129-131）

このように真のお父様は、祝福家庭が、その氏族圏を祝福す

ることで真の父母に「接ぎ木しなければならぬ」と言われていたのです。

『統一教会の分裂』が「今まで世間に染まっています」と引用したみ言は、祝福家庭に対し、「真の父母と関係がない」その両親や兄弟は「神様の愛の怨讐である姦夫の血統を受けた後継者」であるために、その血統を「完全否定」しなければならぬと語られたものです。

また、「きれいに清算して、再び愛さなければならぬ」と語られた意味も、祝福家庭の両親や兄弟を、真の父母様に「接ぎ木しなければならぬ」、すなわち祝福を通して「神様の愛の怨讐である姦夫の血統」を清算して、互いに愛し合う「神様の祖国と平和王国時代に生きる存在」となりなさいという意味なのです。

ところが、『統一教会の分裂』は「韓鶴子の不従順」な姿を何とかして描こうと、み言を隠蔽することで、真のお父様の語っておられる真意をゆがめて記述しているのです。

二〇〇四年一月一日の「真の神の日」記念礼拝で、真のお父様は次のように語っておられます。

「お兄さん、お姉さんのカイン世界が残っているので、『特別聖塩と聖酒』を使って、それを浄化させなければならぬ責任が（皆さんに）あり、統班撃破完了をしなければならぬのです。それが特別責任です。……『特別聖塩』と『特別聖酒』を使って祝福し、カイン、アベル圏をつくってこそ、神の祖国の上に立つことができる氏族、民族、国家が形成されるのです」
（『ファミリー』二〇〇四年二月号、60ページ）

また、真のお父様は二〇〇四年一月二十六日に、次のように語っておられます。（注、楷書体の部分は『統一教会の分裂』

これは祝福家庭が「自分を生んでくれた母、父を本当に愛し」て氏族圏を祝福することで、「神様の祖国と平和王国時代に生きる存在」となってほしいという切実な思いで語っておられるみ言です。

（3）二〇〇四年八月三十一日のみ言——あきれん恣意的解釈
『統一教会の分裂』は、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に對して苦心しておられるみ言であるとして、二〇〇四年八月三十一日のみ言を次のように引用しています。

「今も私がお母さんに、お金の全権を与えました。……そうだからと言って、お母さんの好き勝手に使っているのではありません。天に報告し、父母様の承諾を得て使うべきであり、お母さんが勝手に使っては引つかかるのです。お母さんはよく理解しなさい」（247ページ）

『統一教会の分裂』は、このみ言を「創始者を不信する韓鶴子の態度」に言及したみ言であると述べます。しかし、これも「虚偽の主張」です。

まず、『統一教会の分裂』の引用したみ言には「……」で省略した部分がありますが、これは重要な部分を隠蔽するためです。

以下、「……」で隠蔽した部分を傍線で表記します。

「今も私がお母さんに、お金の全権を与えました。献金が入つてくれば、お母様が受けるのであって、私が受けません。そうだからと言って、お母さんの好き勝手に使っているのではありません。天に報告し、父母様の承諾を得て使うべきであり、お母さんが勝手に使っては引つかかるのです。お母さんはよく理

からの引用文で、誤訳もありますが、み言を隠蔽している箇所を明確にするため、あえてそのまま引用します。」

「先生がこれからはお母さんとは別れて、再び結婚の準備をしなければならぬということです。そうです。今まで世間に染まっています。そうだからと言って、他の人の家庭とするというのではありません。愛し続けることができないということです。きれいに清算して、再び愛さなければならぬということです。

それで、統一教会の教会員たちも、先生を最も恋慕い、先生の後ろだけ従っていき、世間の男性を否定したのですが、今からはそのように先生だけ考えていたのを、先生を否定して、天の国の娘になったり、息子になったりして、その男性たちをもつと愛さなければならぬ、ということです。自分を生んでくれた母、父を本当に愛しなさいということです」（マルスム選集433-139）

『統一教会の分裂』が引用した部分に続いて、真のお父様は、『統一教会の教会員』が、今まで「先生の後ろだけ従っていき、世間の男性を否定」してきたが、今からは「先生だけ考えていた」のを否定し、「自分を生んでくれた母、父を本当に愛しなさい」と語られました。（傍線部分）

これは二〇〇四年一月一日、「真の神の日」にお父様が語られた祝福家庭の「特別責任」の内容であり、自分の両親や親族を祝福に導いて、「神様の祖国と平和王国時代に生きる存在」になりなさいという意味なのです。

このように、『統一教会の分裂』が引用した二〇〇四年一月二十六日のみ言には、真のお父様の「韓鶴子の不従順」に對する「残念な感情」など一切存在しません。

解しなさい」（マルスム選集466-246）

このように「献金が入ってくれば、お母様が受けるのであって、私が受けません」という部分を意図的に削除し、「お金の全権」に對する具体的な内容を隠蔽しています。真のお父様は「献金が入ってくれば、お母様が受ける」という「お金の全権」を真のお母様に与えたと語っておられるのです。『統一教会の分裂』が引用したみ言は、重要な前提となる部分が削除されています。

さらに、真のお父様は、このみ言の直前の部分で次のように語っておられます。

「今回、総生畜献納をしなさいというのに、皆が全て躊躇しています。……世界の女性たちの貯金通帳をみんな集めて世界銀行をするようになれば、経済圏が完全に統一されてしまうのです。エバ（女性）によって失ったために、エバ（女性）によって取り戻さなければならぬのです。今も私がお母さんに、お金の全権を与えました。献金が入ってくれば、お母様が受けるのであって、私が受けません」（マルスム選集466-246）

このように、真のお父様は「総生畜献納」による「献金が入ってくれば、お母様が受ける」と語られました。また、「エバ（女性）によって失ったために、エバ（女性）によって取り戻さなければならぬ」というため、真のお母様に「お金の全権」を与えておられるということです。

そして、真のお父様は、続けて次のようにも語っておられます。

「天に報告し、父母様の承諾を得て使うべきであり、お母さ

んが勝手に使っては引かかるのです。お母さんはよく理解しなさい。一銭であつても全て記録を残して、どこに使つたのかを説明しなければならぬのです。こうして国を取り戻した後に、世界を取り戻した後に、金銭も管理できる全権時代が先生に渡ってくるのです」(マルスム選集466-246-247)

このように、真のお父様は「一銭であつても全て記録を残して、どこに使つたのかを説明しなければならない」と語っておられ、そのことを「お母さんはよく理解しなさい」と指導しておられるのです。

以上のように、『統一教会の分裂』は、み言を引用し、それらが「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言であると主張しますが、それらを検証すると、ことごとくみ言の前後の部分を隠蔽して自分たちの主張に合致するように読者を誤導するための引用をしているのです。さらに、恣意的な解釈をつけて、み言の真意をゆがめているのです。

(4) 二〇〇四年十二月四日のみ言——直後の部分の隠蔽

『統一教会の分裂』は247ページで、真のお父様が「韓鶴子に対する残念な感情」を表しているとして、二〇〇四年十二月四日のみ言を引用します。

「精子と卵子が出発して、神様の愛の心情を持った精子が出発して、何千万年です。定着することができませんでした。(精子が)真なる女性の、愛の相對の卵子の家に育つことができなかった。これなのです。そう、女性の子宮でそのような精子を育て、私がお母さんの心を持って愛そうという、愛の心

え」であり、お母様は「真なる女性の、愛の相對」ではないということになるのです。しかし、実際には真の父母様は離婚しておられない事実を見れば、このみ言は、お母様が「よしれ」でも「間違つ」てもおられないことを意味するのであり、お母様こそが「真なる女性」であることを証しているみ言にほかなりません。

また、真のお父様は「私が離婚しました」と語っておられますが、これは「(女性が) よじれたため、間違つたゆえに」生じたということです。このことで「神様の愛の心情を持った精子が出発して、……定着すること」ができませんでした。なぜなら、「女性の子宮でそのような精子を育て、私がお母さんの心を持って愛そうという、愛の心を持つことができる女性」が現れていなかったからです。ですから、「神様の愛の心情を持った精子」が「真なる女性の、愛の相對の卵子の家に育つことができなかった」のです。それゆえ、お父様は「そのような女性を探す為」、苦勞の道を歩まれたのです。

そして真のお父様は、「神様の愛の心情を持った精子が出発して、……定着すること」ができる「年の幼いお母様」を探し立てられて、一九六〇年、真の父母様は「小羊の婚宴」(聖婚)をされています。

したがって、この二〇〇四年十二月四日のみ言には、真のお父様の「韓鶴子の不従順」に対する「残念な感情」など一切ありません。むしろ、このみ言には、お父様が「年の幼いお母様を」探し立て、「育てて」これ、[妻の立場で(お父様に)侍る女性]として再創造し、「真なる女性の、愛の相對」が現れたという喜びの心情が込められているのです。

したがって、『統一教会の分裂』が二〇〇四年十二月四日のみ言を引用して「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言であると

を持つことができる女性がいるかということです。そのような女性を探す為に、私が離婚しましたのです。何の話か分かりますか。ですから、お母さんに代わる候補者を立て訓練させるかもしれないです」(マルスム選集479-156)

『統一教会の分裂』は、この内容が「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言であると述べます。しかし、これも引用したみ言の直後の部分を隠蔽し、意味をゆがめています。

真のお父様は、次のように語っておられます。

「……そのような女性を探す為に、私が離婚しましたのです。何の話か分かりますか。ですから、お母さんに代わる候補者を立て訓練させるかもしれないです。……(離婚は)二度とありえないのです。あるとすれば、間違ひなく(女性が)よじれたため、間違つたゆえに、そのような先生を迎えて、本当の妻の立場で(真のお父様に)侍る女性がどこにいますか？ ですから、年の幼いお母様を育ててくるのです」(マルスム選集479-156、「楷書体の字」は『統一教会の分裂』から引用。3行目「(離婚は)二度とありえないのです。」からは教理研究院の翻訳、以下同じ)

このように、『統一教会の分裂』がみ言を意図的に隠蔽した部分で、真のお父様は「(離婚は)二度とありえない」と語っておられます。しかし、離婚が「あるとすれば、間違ひなく(女性が)よじれたため、間違つたゆえ」であると語っておられるのです。

もし、真のお母様が真のお父様と離婚するようなことがあれば、それは「間違ひなく(女性が)よじれたため、間違つたゆ

するのは、虚偽の主張」です。

(5) 二〇〇五年二月二十日のみ言の隠蔽

『統一教会の分裂』は247ページで、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対し苦心しているみ言であるとして、二〇〇五年二月二十日のみ言を次のように引用しています。

「先生はどうだと思えますか。お母さんと完全に一つになったと思えますか。完全に一つにならなければなりません。個人的に完全に一つとなり、お腹の中で双子なのです」(マルスム選集488-58)

しかし、これも虚偽の主張」です。『統一教会の分裂』は、引用した上記のみ言の前後の部分を隠蔽し、その意味をゆがめています。真のお父様は、このみ言の前後で次のように語っておられます。

「……ここで家庭を持っている人たち、手を挙げてみなさい。ご苦勞だね。それは野生のオリーブの木の家庭ですか。真のオリーブの木の家庭ですか？ 最近、女性の中で男性(夫)の前に絶対服従する女性は一人もいません。なぜでしょうか？ 夫たちが天使長です。僕と付いたからです。あのおばさんもそう？ 統一教会もそうです。『ああ、先生が(二人を)結婚させたので、しかたなく生活するのであって、あんなやつ(夫)死ねばいい』という思いを、時折するときがありますか、ありませんか？

文サシヒ！ (「そのような考えはしませんでした」) イライラするときがあるでしょう？ (「はい」) イライラするからしか

たなくそのような思いが出るというのです。

先生はどうだと思えますか。お母さんと完全に一つになったと思えますか。完全に一つにならないければなりません。個人的に完全に一つとなり、お腹の中で双子なのです。

本来、アダムとエバはふたごですが、まず、アダムが（お腹から）先に出るのです。……無形の神様が二性性相でおられるときはふたごとして、育ち、格位では男性格なのです。（アダムが先に出て）区別するのです。男性、女性に分かれて、これが大きくなって再び人として体を持ち、生理的構造は全て同じなのです。ですから、ふたごとなって生まれたのと同じであるということです。神様オモ二のお腹の中で。（神様は）二性性相の中和的存在であり、格位では男性格主体なのです」（マルスム選集488-57、58。太字ゴシックと圏点は教理研究院、以下同じ）

『統一教会の分裂』は、このみ言のうち12行目から14行目までの傍線の部分だけを引用しています。隠蔽した直前の部分で、真のお父様は「野生のオリーブの木の家^{（ト）}庭」は「夫たちが天使長」であるために「男性（夫）の前に絶対服従する女性は一人もいません」と語っておられます。

さらに、「統一教会もそうです」とも語っておられます。その一例として、訓読会に参加している文サ^{（ト）}ンヒ氏に対して、『……あんなやつ（夫）死ねばいい』という思いを、時折するときがありますか、ありませんか？」と尋ねられました。文サ^{（ト）}ンヒ氏は「そのような考えはしませんでした」と答えましたが、真のお父様は「イライラするからしかたなくそのような思いが出る」と語られました。

反対に「真のオリーブの木の家庭」である「先生はどうだと

る神（神様アボジ）と母なる神（神様オモ二）の両方としての無形の父母」であることに言及しておられます。正に、『原理講論』に「父母なる神」（61ページ）、「天の父母なる神」（235ページ）とあるように、神様は「天の父母様」なのです。

（6）二〇〇五年二月二十一日のみ言の主語を書き加えて改竄

『統一教会の分裂』は247、248ページで、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対し苦心しているみ言であるとして、二〇〇五年二月二十一日のみ言を次のように引用します。

「統一教会に中心がありますか。家庭的中心がありますか。先生も未だに、お母さんを中心として越えることができる峠を越える為に、執拗に耐えているのです。……一人の女性を育て、理想的な妻をつくるのが、世界統一より難しいのです。『宇宙主管を願う前に自己主管を完成せよ』ということよりも難しいのです。それをお母さんが分かっています。今聞いているでしょう。今から知らなければならぬ。一昨日お母さんが『先生は原理的に成されますが、私はそうではありません』と言うのです。これ以上怖い言葉がどこにありますか。目の前にいます」（マルスム選集488-156）

『統一教会の分裂』（日本語版）は、このみ言を「創始者を不信する韓鶴子の態度」に言及したみ言であるとしています。しかし、これもみ言を改竄しているものです。

まず、『統一教会の分裂』が引用しているみ言には「……」で省略した部分がありますが、これは重要な部分を隠蔽するために使う手法です。

思えますか。お母さんと完全に一つになったと思えますか」と訓読会の参加者に尋ねられ、真のお父様が「完全に一つにならないければなりません」と語られました。その後で「個人的に完全に一つとなり、お腹の中で双子なのです」と語られたのです。

これは、「真のオリーブの木の家庭」である真のお父様と真のお母様が、「お腹の中で双子」として「完全に一つ」であることを説明しておられるみ言です。すなわち、お母様は「男性（夫）の前に絶対服従する女性」なのであって、お父様とお母様が「真のオリーブの木の家庭」であるということを証ししておられるものです。ところが、『統一教会の分裂』は直前の部分を隠蔽して意味をゆがめているのです。

また、『統一教会の分裂』が引用したこのみ言の直後の部分で、真のお父様は「本来、アダムとエバはふたご」であると語られ、『神様オモ二のお腹の中』で「ふたごとなって生まれたのと同じである」と言われています。ここで、お父様が「お腹の中で双子」であると語っておられるように、真の父母様は共に「神様オモ二のお腹の中」で「ふたごとなって生まれたのと同じである」というのです。

すなわち、お父様と真のお母様は「ふたごとなって生まれたのと同じである」ので「完全に一つ」であると述べておられるのが、このみ言の意味なのです。

また、真のお父様は「無形の神様が二性性相でおられるときはふたごとして育ち、格位では男性格」であり、「（神様は）二性性相の中和的存在、格位では男性格主体」であると語っておられます。さらに、「神様オモ二のお腹の中」で「アダムとエバはふたご」として育ったのだと語られました。

ここで、真のお父様は、「神様オモ二のお腹の中」と語っておられるように、神様は「二性性相」の存在であられ、父な

以下、「……」の部分を補います。（傍線部分）

「先生も未だに、お母さんを中心として越えることができる峠を越える為に、執拗に耐えているのです。目玉が飛び出す困難があつても舌をかみながら（真のお母様に）話をしないのです。一人の女性を育て、理想的な妻をつくるのが、世界統一より難しいのです。『宇宙主管を願う前に自己主管を完成せよ』ということよりも難しいのです。それをお母さんが分かっています。……」（マルスム選集488-156）

なお、この『統一教会の分裂』（日本語版）が引用したみ言には、意図的な誤訳があります。最後の行の「それをお母さんが分かっています」という部分は、正しくは「そのことをお母様は知りません」という訳になります。

すなわち、真のお父様が「目玉が飛び出す困難があつても舌をかみながら（真のお母様に）話をしないのです」と語られた重要な部分を削除し、真のお母様が「理解していない」という意味での「それを……分かっています」という訳語を当てることで、その意味をゆがめているのです。ここは「そのことをお母様は知りません」と訳さなければなりません。

このように、『統一教会の分裂』は「韓鶴子の不従順」な姿を描こうとして、み言の重要な部分を隠蔽し、さらに意図的な翻訳の歪曲によって、真のお父様の語っておられる真意をゆがめています。

また『統一教会の分裂』は、続けて次のように引用しています。

「……それをお母さんが分かっています。今聞いているでしょう。今から知らなければならぬ。一昨日お母さんが『先生は

原理的に成されますが、私はそうではありません』というのです。これ以上怖い言葉がどこにありますか。目の前にいます」(マルスム選集488-156、157)

ここで、「昨日お母さんが『先生は原理的に成されますが、私はそうではありません』と言うのです。これ以上怖い言葉がどこにありますか。目の前にいます」と翻訳していますが、これも、恣意的な翻訳によるみ言の改竄です。正しく翻訳すれば、次のようになります。

「数日前した話、『先生は原理的にしますが、私はそうではありません』というのです。それ以上、恐ろしい言葉がどこにありますか？ 目の前において」(翻訳は教理研究院)

内村鑑一訳『統一教会の分裂』(日本語版)では、主語として「お母さんが」という言葉をおつてに書き加えており、み言の改竄をしています。この書き足しによって、翻訳者である内村鑑一氏は、真のお母様が「先生は原理的に成されますが、私はそうではありません」と語っておられるかのように意味を変えているのです。

『統一教会の分裂』は、「韓鶴子の不従順」という虚偽のストーリーを描くために、捏造行為をしています。「昨日お母さんが」という部分は正しくは「数日前した話」となります。さらに、「目の前にいます」と訳していますが、これも意図的なみ言の改竄です。正しくは「目の前において」です。

『統一教会の分裂』は、主語を「お母さんが」にすり替え、さらには「目の前にいます」とすることで、まるで「創始者が韓鶴子に対する残念な感情」を抱いているかのように読者を

して、次のように、二〇〇五年三月二日のみ言を引用します。

「お母さん、しっかり理解しなさい。神様がお母さんを中心として、先生と一つになれとは言いません。そんな道理はありません。心の位置に夫を中心として一つとなった後、その夫と一つとなった神様を中心として、絶対信仰・絶対愛・絶対服従しなければなりません。……お父さんよりお母さんを好きになるのは何故か。お母さんと通じれば無事だから。お父さんを騙してするから。そうしてみなさい。それは全て壊れていくのです。その子孫は、すでに決着が着くのです。お父さんの承諾を受けなければなりません」(マルスム選集489-222、223)

しかし、『統一教会の分裂』は、引用したみ言の直前の部分を隠蔽し、全体の意味をゆがめているのです。

隠蔽された部分で、真のお父様は次のように語っておられます。

「韓国の歴史において、息子、娘は絶対に、父の息子、娘という言葉が合うのです。最近、狂った人たちが……。戸主はどうなるの？ 互いが戸主の看板を付ければどうなるの？ 父が息子、娘を治め、妻まで治めなければならないのに、妻が思いどおりにし、息子、娘が思いどおりにして主人になるならば、父は何になるのですか？ 神様を踏みつけて、上を、前を全て踏みつけようというのではないですか？ そんな考えをしていると、それは滅びます！ 滅びる輩たちがそのような話をするので。お母さん、しっかり理解しなさい。……」(マルスム選集489-222)

このみ言を理解するには、二〇〇五年当時の韓国の状況を知

信じ込ませるよう誤導しているのです。

そして、『統一教会の分裂』は、このみ言の直後の部分(以下に傍線で示した部分)も隠蔽しています。(注、こども『統一教会の分裂』は改竄していますが、どの部分を隠蔽しているのかを明確にするため、あえてそのまま引用します。)

「……昨日お母さんが『先生は原理的に成されますが、私はそうではありません』と言うのです。これ以上怖い言葉がどこにありますか。目の前にいます。ためらわず先生はそれを忘れてしまふのです。怨讐を忘れるのと同じです。怨讐がいれば忘れるのです。(先生は)名前を忘れてしまい、顔を忘れてしまふのです」(マルスム選集488-156)

真のお父様は、「先生は原理的に成されますが、私はそうではありません」という「恐ろしい言葉」を「忘れてしまふ」と語っておられます。これは、誰かがお父様に「数日前した話」なのであり、そのような「恐ろしい言葉」を発した人物の「名前を忘れてしまい、顔を忘れてしまふ」のだと語っておられるみ言です。

ところが『統一教会の分裂』は、この内容が、真のお母様が語られた言葉であるかのように改竄しており、これを「不信する韓鶴子の態度」を裏づけるみ言であるとしているのです。これは、とんでもない虚偽の主張です。

(7)二〇〇五年三月二日のみ言——主語の削除

『統一教会の分裂』は248、249ページで、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対し苦慮しておられるみ言であると

らなければなりません。

当時、韓国の憲法裁判所が「戸主制」に対して違憲判決を下したことが韓国内で話題となり、韓国国会内でも「戸主制」の廃止が議論されていました。実際に二〇〇五年三月二日、韓国国会は「戸主制」を廃止する民法改正案を可決しています。

そのような韓国の「戸主制」廃止の動きについて、真のお父様は「韓国の歴史において、息子、娘は絶対に、父の息子、娘という言葉が合う」と語っておられます。さらに、お父様は「互いが戸主の看板を付ければどうなるの？ ……妻が思いどおりにし、息子、娘が思いどおりにして主人になるならば、父は何になるのですか？」と懸念され、「神様を踏みつけて、上を、前を全て踏みつけようというのではないですか？ そんな考えをしていると、それは滅びます」と危惧しておられます。お父様は「滅びる輩たちがそのような話をする」ので、そのことを「お母さん、しっかり理解しなさい」と念を押しておられます。そして、真のお父様は、「お母さんを中心として、先生と一つ」になることではなく、「夫と一つとなった神様を中心として、絶対信仰・絶対愛・絶対服従」しなければならないと語られ、天の秩序を明確にしておられるのです。

ところが、『統一教会の分裂』は直前の前提となる部分を意図的に削除することで、み言の真意をゆがめています。このみ言は「韓鶴子の不従順」を裏づけるものではありません。

また、『統一教会の分裂』が引用した真のお父様のみ言には、「……」で削除した部分がありますが、これは重要な部分を隠蔽するためです。以下、「……」の部分を傍線箇所て引用します。

「心の位置に夫を中心として一つとなった後、その夫と一つとなった神様を中心として、絶対信仰・絶対愛・絶対服従しなけ

ればなりません。……だから、サタン世界の息子、娘たちがお母さんを好むのは、お父さんよりお母さんを好きになるのは何故か。お母さんと通じれば無事だから。お父さんを騙してするから。そうしてみなさい。それは全て壊れていくのです。その子孫は、すでに決着が着くのです。お父さんの承諾を受けなければなりません」(マルスム選集489-222、223)

すなわち、真のお父様は「サタン世界の息子、娘たちが……お母さんを好きになるのは何故か」と問われ、その理由について「お母さんと通じれば無事だから。お父さんを騙してするから」だと語っておられるのです。

ところが、『統一教会の分裂』は「創始者を不信する韓鶴子の態度」という、ありもしない、虚偽のストーリーを描くために、「サタン世界の息子、娘たちが」という主語の重要な部分を削除することで、まるで「お母さん」の文言が、真のお母様のことを指して語っておられるかのように読者を誤導しているのです。これは極めて悪意のある隠蔽行為です。

(8)二〇〇五年二月二十五日のみ言——郭錠煥氏への叱責の部分を隠蔽

『統一教会の分裂』は248ページで、真のお父様が「韓鶴子に対する残念な感情」を表しているとして、二〇〇五年二月二十五日のみ言を次のように引用しています。

「ついに真の父母が来て神様と一つになり、体を永遠に探すためにも苦労しました。それを知らなければなりません。お母さんを再び創造、作らなければなりません。お母さんが主張

このみ言は二〇〇五年二月十四日(天暦一月六日)、真のお父様が八十六歳(数え)、真のお母様が六十三歳(同)のご聖誕日を迎えて語られたものであり、その日、真の父母様は「天宙統一平和の王戴冠式」を清平(現、HJ天宙天寶修鍊苑)で挙行されました。

本来なら、お母様が「十七、十八歳以前(の若いとき)に来て結婚したならばその日からできるはずなのに、再蕩減しよう」と(お母様が)六十三歳を迎えるまで待つて、真の父母様は「天宙統一平和の王戴冠式」を挙行され、「天一国の出発が連結され」たと言われるのです。そのため、お父様は「神様と一つになり、(神様の)体を永遠に探すためにも苦労し……お母さんを再び創造」されたと言われています。

『統一教会の分裂』の日本語版は、「お母さんが主張できない部分なのです」と訳していますが、正しくは「お母様は、主張することがないのです」になります。

これは、真のお母様が、絶対従順であられることを語られたみ言です。この訳は、翻訳者である内村鑑一氏による悪意のある、ないし意図的な誤訳です。

また、上記のみ言に続いて『統一教会の分裂』は重要なみ言を「……」で削除し、次のように引用しています。以下、「……」の削除部分を傍線の付いた文字で表記します。

『お母さん、分かったか。お母さんの責任、お父さんの責任を知らなければなりません。この愚か者が、王権も相続していないのに、お母さんを引き出せばどうなるか。サタンが捕まえるのです。アメリカで誰か、以前、女性連合の会長だった人が「お父様はお母様を尊敬しているか、崇拜しているか」と言うのですが、この小娘が、崇拜しなければならぬと子供たちに教えていたというのです。そのようなことを知っているの?」

できない部分なのです。…お母さん、分かったか」(マルスム選集489-27)

『統一教会の分裂』は、この内容が「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言であると述べていますが、引用した直後の部分を「……」で省略し、さらに日本語訳本ではゆがめた翻訳をすることで意味を改竄しています(注、太字の部分)。

以下、「……」の部分を再現します(傍線部分)。

『ついに真の父母が来て神様と一つになり、(神様の)体を永遠に探すためにも苦労しました。それを知らなければなりません。お母さんを再び創造、作らなければなりません。お母さんが主張できない部分なのです。だから今回、清平で……。お母様が六十二歳から六十三歳を超えていくのです。さぶろくじゅうはち(3×6=18)です。十八歳から、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三歳……と経験していく過程で、今日で言えば六十三歳、十七、十八歳以前に来て結婚したならばその日からできるはずなのに、再蕩減しよう(お母様が)六十三歳を迎えながら、天一国の出発が連結されるのです。お母さん、分かったか」(マルスム選集489-27、「楷書体の字」は『統一教会の分裂』からの引用。「傍線部」は教理研究院による、以下同じ)

『統一教会の分裂』が「……」で削除した部分で、真のお父様は「今回、清平で……。お母様が六十二歳から六十三歳を超えていくのです。……六十三歳を迎えながら、天一国の出発が連結される」と語っておられます。そして、真のお母様の六十三歳とは「さぶろくじゅうはち(3×6=18)」であり、「再蕩減しよう」と六十三歳を迎えながら、天一国の出発が連結される」と言われたのです。

郭錠煥。「よく知りません」知らないでしょう。先生は間違いないく知っているのに、(郭錠煥氏は)知らないのに、頂上へ上がるのができないのです。分かりますか? (はい) 最近、女性を立てるので、女性が一番だと思い、(郭氏も)お母さんを立てようとするのですが、父母様を立てなければならぬのです」(マルスム選集489-27、28)

このように、真のお父様は、「以前、女性連合の会長だった人が『お父様はお母様を尊敬しているか、崇拜しているか』と言うのですが、この小娘が、崇拜しなければならぬと子供たちに教えていた」ことについて「そのようなことを知っているの? 郭錠煥」と尋ねておられます。郭錠煥氏が「よく知りません」と返事すると、お父様は「(郭錠煥氏は)知らないのに、頂上へ上がることができない」と叱責されたのです。そして、お父様は「最近、女性を立てるので、女性が一番だと思い、(郭氏も)お母さんを立てようとするのですが、父母様を立てなければならぬのです」と語られたように、郭錠煥氏を指導しておられるのがこのみ言です。

ところが重要な部分を「……」で削除し、その事実を隠蔽しているのです。

『統一教会の分裂』の引用の仕方では「この愚か者が、王権も相続していないのに……」という部分は、まるで真のお父様が真のお母様を「愚か者」と叱責しておられるみ言であるかのように読めますが、隠蔽した部分を削除せずに全体の文脈から読むと、「この愚か者が」とは、お母様のことではなく、幹部たちを叱責しておられるみ言であることが分かります。

さらに、次のように引用しています。

「お父様の行く道に皆さんが、女性たちが一つになり、お父

様に待らなければ、この女性たちが実体サタンとなるのです。
金孝律！ 公金があれば、お母さんが欲しいと言うからといって、お父さんに隠れて支払えば、問題が起きるのです。お父さんに尋ねなければならぬのです。最終決定は。分かったか、お母さんが共に待りお父さんの前に報告すれば、お母さんと一つとなりますが、お母様を中心としてお父様が一つになるのは、墮落ではないですか。原理を外れた道理はありません」（マルスム選集489―28―29）

このみ言は、改竄されたものです。以下、削除されている部分（傍線部）を指摘し、郭錠煥氏に関する部分を含めて引用します。

「お父様の行く道に皆さんが、女性たちが一つになり、お父様に待らなければ、この女性たちが実体サタンとなるのです。……（12行を省略）……。郭錠煥！「はい」金孝律！ 公金があれば、お母さんが欲しいと言うからといって、お父さんに隠れて支払えば、問題が起きるのです。お父さんに尋ねなければならぬのです。最終決定は。分かったか、何の話か？（はい）報告するときは必ず（あなたたちが）来て、お父様が（お母様と）一緒にいるので、お父様が家にいれば、（あなたたちが）家に入ってきて、お母さんが共に待りお父さんの前に報告すれば、お母さんと一つとなりますが、お母様を中心としてお父様が一つになるのは、墮落ではないですか。原理を外れた道理はありません」（マルスム選集489―28―29。注、傍線部が、削除された部分）

このように、『統一教会の分裂』は、「この女性たちが実体サタンとなるのです。金孝律！ 公金があれば」と引用してい

子の不従順」に対し苦慮しているみ言であるとして、二〇〇五年七月三日のみ言を次のように引用します。

「お母さんを選んで、お母さんが峠を越えるまでできなければ、取り替えることができます。国家基準で。世界を超える時まで、お母さんは完全にお父さんと一つにならなければなりません。お母さんはそんなことも知らずにいます。お母さんは今まで世間の女性と同じ立場で、断食もさせず、全てするなど言いました。これは初めて聞くでしょう。七日断食をしませんでした。伝道もさせませんでした。そうすべきではないですか」（マルスム選集499―235―236）

このように記して、この内容が「創始者を不信する韓鶴子の態度」を裏づけるみ言であるとしています。しかし、これも「虚偽の主張」です。『統一教会の分裂』は、み言の直前の部分を隠蔽して意味を「改竄」しています。

真のお父様は、この前段で次のように語っておられます。（傍線部）

「先生がお母様を中心として峠を越えた後には、女性の手首すら一度もつかみませんでした。何の話か分かりますか？（天の）法があるのです。神の日はいつですか？ 一九六八年一月一日でしょう？（はい）それ以降には別の考えをしてはいけ

ないのです。お母さんを選んで、お母さんが峠を越えるまでできなければ、取り替えることができます。国家基準で。

世界を超える時まで、お母さんは完全にお父さんと一つにならなければなりません。お母さんはそんなことも知らずにいます。お母さんは今まで世間の女性と同じ立場で、断食もさせず、

ますが、原典に当たってみると、「この女性たちが実体サタンとなるのです。……（12行を省略）……。郭錠煥！「はい」金孝律！ 公金があれば……」となっており、十二行分のみ言と郭錠煥氏の名前とが削除されています。このように削除することで、真のお父様が指導されている内容とみ言の意味を「改竄」しています。

お父様は、郭錠煥氏と金孝律氏に対して、「公金があれば、お母さんが欲しいと言うからといって、お父さんに隠れて支払えば、問題が起きる」と叱責しておられるのです。さらに郭錠煥氏に対しても、公金の用途に対する最終決定は「お父さんに尋ねなければならぬ」と厳しく指導しておられる事実を隠蔽しているのです。

真のお父様は郭錠煥氏に対し、お父様に報告するときの「原理原則」について指導しておられます。すなわち、お父様は「お父様が（お母様と）一緒にいるので、お父様が家にいれば」、郭錠煥氏と金孝律氏が真のお母様に待り「お父さんの前に報告すれば、お母さんと一つとなります」と指導しておられるのです。しかし、そうでない場合は「原理を外れた道理」であるということ、郭錠煥氏に教育しておられるのがこのみ言です。ところが、『統一教会の分裂』は「郭錠煥」氏の名前をことごとく削除すること、真のお父様が「郭錠煥」氏に対して叱責しておられる事実を隠しており、まるで真のお母様を叱責しているみ言であるかのように読ませようとしているのです。

（9）二〇〇五年七月三日のみ言——勝利された真のお母様である事実を隠蔽

『統一教会の分裂』は249ページで、真のお父様が「韓鶴子（ハンガ）全てするなど言いました。これは初めて聞くでしょう。七日断食をしませんでした。伝道もさせませんでした。そうすべきではないですか」（マルスム選集499―235―236）

このように、み言を隠蔽した部分で、真のお父様は「一九六八年一月一日」の「神の日」について語っておられます。この「神の日」とは、真の父母様が完成期の七年期程を歩まれ、一体となつて神様の直接主管圏に入られたことを宣布した日です。真のお父様は、「お母さんを選んで、お母さんが峠を越えるまでできなければ、取り替えることができます。国家基準で」と語っておられますが、その直前で「先生がお母様を中心として峠を越えた後には、……別の考えをしてはいけない」と語っておられます。すなわち、お父様は「お母様を中心として峠を越え」て、一つとなつて勝利されたことについて語っておられるのです。

ところが、『統一教会の分裂』は直前の部分を削除し隠蔽すること、お父様が語られたみ言の真の意味である「勝利された真のお母様」を全く逆の意味に捉えるようにしています。

『統一教会の分裂』が引用したみ言の部分は一九六八年一月一日の「神の日」を迎える以前のこと、すなわち真のお母様が一九六〇年の聖婚から「七年期程」を歩まれた内容について語っておられるものです。

真のお父様は、「神の日」を宣布できた理由を次のように語っておられます。

「お母様が女性として、夫がどのようなことをしても従順屈伏し、それ以上の条件を立てることができないという限界点までも越えて（お父様に）従順に従ったという基盤を立てたので、

その基盤のもとで『神の日』まで設定することができたということ、皆さんは知らなければなりません」（『真の御父母様の生涯路程⑩』144ページ）

真のお父様は「『神の日』まで設定することができた」のは「お母様が女性として、夫がどのようなことをしても従順屈伏し、……限界点までも越えて（お父様に）従順に従ったという基盤を立てた」ためだと語っておられ、そのことを「皆さんは知らなければなりません」と強調しておられます。すなわち、真のお母様は絶対信仰、絶対愛、絶対服従でお父様と一つとなって勝利されたと言われるのです。そのことによって、お父様は「神の日」を宣布されたというのです。

さらに、真のお父様は次のように語っておられます。

「（一九六〇年から）七年を経て一九六八年正月一日を中心として、このすべての蕩滅の道を越えて『神の日』を策定することによって、お母様の權威が生まれ、地上に着陸時代が到来し、世界的進出の発端が始まったのです」（同、146～147ページ）

すなわち、真のお母様はお父様と完全に一つとなって「すべての蕩滅の道を越えて」勝利されたので、お父様は「神の日」を策定することができ、それによって「世界的進出の発端」が始まったということです。

『統一教会の分裂』が引用したみ言は、真のお父様が「お母さんを選んで、お母さんが峠を越えるまで」の歩みの内容、すなわち真のお母様が一九六〇年の聖婚以後に歩まれた七年路程について語っておられるものです。

真のお父様は、七年路程について次のように語っておられます。

（10）二〇〇九年二月二十七日のみ言——引用したみ言の一部の意味を、改竄^{ひんざん}。

『統一教会の分裂』は250ページで、真のお母様が「統一原理に対する未成熟」であるため、真のお父様が苦慮しているみ言であるとして、二〇〇九年二月二十七日のみ言を以下のように引用しています。

「神様が原罪のある先生を使うだろうか。十六歳まで、アダムとエバの血統は間違っていないでせんでした。何故、十六歳を重視するのでしょうか。十六歳までは墮落しなかったのです。その継代をつなぐのです。その前まで掘り下げて先生に原罪があるか、ないかということを自分たちが決定できますか。つまらないことをしています。

私がそんなことを考えずにここで教主の役目をし、血統を正すと言うことができますか。私は幼い頃から天が教えてくれました。血統が正常かどうかを聞かなかったでしょうか。口にもするなというのです、口にもするなと。私が尋ねると、天が口にもするなと言ったのです」（二〇一二年「真の父母様ご聖誕日記念出版」版のマルスム選集608～276～277）

『統一教会の分裂』は、この内容が「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言であるとしています。しかし、ここでも引用したみ言の直前の重要な部分を隠蔽して意味を、改竄^{ひんざん}しているのです。

真のお父様は、直前で次のように語っておられます。（傍線部）

「あなたたちが何、先生は原罪があるのか、ないのかと言うことができません。神様が原罪のある先生を使うだろうか。十六歳まで、アダムとエバの血統は間違っていないでせんでした。

「七年路程の間、お母様がサタン世界の讒訴条件から抜け出す道を歩むようになったのです。それを成そうとすれば、お母様自身がサタンと直接的な争いをしては絶対にいけません。先生に絶対従順しなければならず、絶対服従しなければならず、常に先生のあとから影のようについてこなければならぬのです。自分勝手に行ったたり来たりすれば、サタンの侵犯を受けるのです」（『神様の祖国解産完成』78～79ページ）

真のお母様が聖婚以後に歩まれた七年路程は、このように深刻な歩みだったのです。それゆえ真のお父様が「断食もさせず、全てするな」と語られたなら、そのみ言に対し絶対服従して、断食や伝道も「自分勝手に」してはいけないと言われたのです。そのようにして一九六八年一月一日の「神の日」を迎えるまでの七年路程において、お母様はお父様に「影のようについてこなければならぬ」歩みをされながら、「今まで世間の女性と同じ」ような立場において「断食もさせず」「伝道もさせ」ずに、それらを行うこと以上にお父様と一体となる歩みをされたのだと言われているのです。

それゆえ真のお父様は「神の日」を宣布することができたのです。それは、真のお母様が絶対信仰、絶対愛、絶対服従でお父様と一つとなって勝利基準を立てられたからです。

ところが『統一教会の分裂』は、直前のみ言の部分を削除して真のお父様が語られたみ言の真の内容、意味をゆがめ、勝利された真のお母様である事実を隠蔽^{いんぺい}することで、読者を誤導しているのです。このみ言も「韓鶴子の不従順」を裏づけるものではありません。

何故、十六歳を重要視するのでしょうか。十六歳までは（アダムは）墮落しなかったのです。その継代をつなぐのです。その前まで掘り下げて先生に原罪があるか、ないかということを自分たちが決定できますか。つまらないことをしています……」（同608～276、「傍線部」は教理研究院による）

このみ言は二〇〇九年二月二十七日、真のお父様が韓国^{チヨソ}の天情苑^{デヨウオン}で午後五時から「真の父母様主管の特別会議」が開催され、そのとき語られたものです。その会議に参加した指導者^{チヨン}たちに対し、お父様が「あなたたちが何、先生は原罪があるのか、ないのかと言うことができます。……先生に原罪があるか、ないかということを自分たちが決定できますか。つまらないことをしています」と語っておられるみ言なのです。

ところが、『統一教会の分裂』は直前の部分を隠蔽し、まるで真のお母様が「先生に原罪があるか、ないか」と述べ、お父様の血統を疑っておられるかのように印象づけようとしているのです。

ところで、『統一教会の分裂』が引用した上記のみ言に関連して、周藤健著『天一国時代を迎えるための成約摂理解説』は次のように解説しています。この書籍は「十六万訪韓修練会」のみ言の内容を集成したものです。

「墮落によってアダム（男性）が天使長の立場になったとしても、アダムの墮落が十六歳の時であったので、十六歳まで神と共にあった基準はそのまま天使長の立場の男性にも相続されており、それが復帰の基台となっている。一方、真のアダムである再臨主は独り子として生まれたが、十六歳（数え）でイエス様よりその使命を相続され、アダムの墮落とその結果を完全

に蕩滅復帰された。すなわち、これが真のお父様における『メシヤ自覚』である。真のお父様はメシヤとして生まれたが、十六歳でイエス様と霊的に会われ、神に召命されたのである。ここにおいて、その勝利された十六歳までの基台の上につながれる（ハンダ付けされる）ならば、天使長の立場の男性も、十六歳で墮落せずに完成し、罪惡世界を天宙に広げなかった立場の本然のアダム（罪なきアダム）の立場に復帰させることができるのである」（338ページ）

真のお父様は「何故、十六歳を重要視するのでしょいか。十六歳までは（アダムは）墮落しなかったのです。その継代をつなぐのです」と語っておられますが、このみ言を原理的に理解するなら、「アダムの墮落が十六歳の時であったので、十六歳まで神と共にあった基準はそのまま天使長の立場の男性にも相続されており、それが復帰の基台となっている」（同）というのです。

また、「真のアダムである再臨主は独り子として生まれたが、十六歳（数え）でイエス様よりその使命を相続され、アダムの墮落とその結果を完全に蕩滅復帰」（同）されたということです。すなわち、真のお父様が「十六歳でイエス様と霊的に会われ、神に召命」された出来事とは、「真のお父様における『メシヤ自覚』」のことなのです。

また、「天使長の立場の男性も、十六歳で墮落せずに完成し、……本然のアダム（罪なきアダム）の立場に復帰」するために、真のお父様に「ハンダ付け」されなければなりません。それゆえ、お父様が「十六歳を重要視」しておられるのは、十六歳はお父様ご自身が「メシヤ自覚」をされた歳であり、さらに天使長の立場の男性が真のお父様に「ハンダ付け」されることで、

十六歳まで墮落しなかったアダムの「継代をつなぐ」ことができるからなのです。

『統一教会の分裂』が引用したみ言は、「統一原理に対する未成熟な指導者たちが、「先生に原罪があるか、ないか」と議論していることに対して、真のお父様がそのようなことを「自分たちが決定できますか。つまらないことをしています」と叱責しておられるみ言なのです。

ところが、『統一教会の分裂』は直前の部分を隠蔽し、その意味を改竄することで、まるで真のお母様が、お父様の血統を疑って語っておられるかのように読ませようとしているのです。

以上のように『統一教会の分裂』は、み言を引用して、それらが「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言であると主張しますが、それらを検証すると、ことごとくみ言の前後および途中の重要な部分を隠蔽し、また「日本語版」では意図的に「誤訳」すること、自分たちの主張に合致するように「詐欺的」な記述に終始していることが分かります。

私たちは、このような非原理集団の人々の流す虚偽の情報に惑わされずに、『最終一体』をなされ、勝利された真の父母様に従って、信仰の有終の美を飾ることができる歩みをしていかなければなりません。

UCIを支持する人々の言説の誤り No.3 定価100円+税

2019年 8 月20日 初版第 1 刷発行

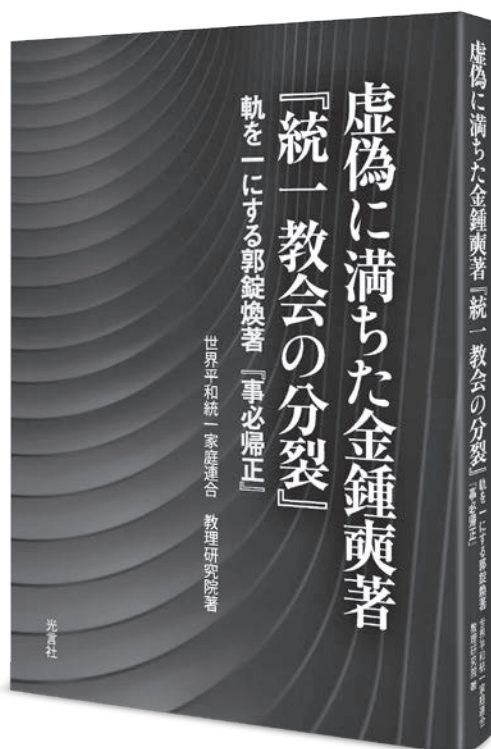
発行 世界平和統一家庭連合
発売 株式会社 光言社
〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町37-18
電話 03 (3467) 3105
https://www.kogensha.jp
印刷 株式会社 ユニバーサル企画

©FFWPU 2019 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

好評発売中

悪意に満ちた虚言に
惑わされないために



虚偽に満ちた金鍾奭著 『統一教会の分裂』 軌を一にする郭錠煥著『事必帰正』

- ◎ 定価 2,376円（本体 2,200円＋税）
- ◎ A5判 416頁
- ◎ 世界平和統一家庭連合 教理研究院 著

2016年、金鍾奭著『統一教会の分裂』が韓国で出版され、UCI（いわゆる「郭グループ」）側の人々が日本で広めています。この書籍は学術書のように装っていますが、真の父母様のみ言を改ざん、隠蔽し、意図的な誤訳をしています。さらには、「統一原理」や摂理観までも恣意的に解釈、説明して真の父母様の位相を否定しており、まさに歴史に残る悪書です。2019年3月に出版された郭錠煥著『事必帰正』（日本語版）も、同様の虚偽のストーリーを展開しています。

本書は、それらの内容がいかにも「虚偽」に満ちたものであるかを明らかにし、体系的に整理したものです。言葉巧みにだまそうとする、悪意に満ちた虚言に惑わされないために、必読の書です。

【目次】

- 第一章 UCIの誤った原理観
 - 第一節 文顯進様の「統一教会の伝統」に関するアイデンティティの誤り
 - 第二節 UCIの非原理的言説
- 第二章 UCIの誤った摂理観
 - 第一節 み言の誤った解釈や隠蔽による虚偽
 - 第二節 UCIが主張する恣意的摂理観
- 第三章 「韓鶴子の不従順」の誤り―十八のみ言の検証
- 第四章 「虚偽まみれ」でも、宗教学者を自称する金鍾奭氏
 - 第一節 虚偽の典拠表記とみ言改竄の実態
 - 第二節 存在しないみ言を騙るUCIの「虚偽」
 - 第三節 「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」という虚偽

ご注文は「光言社オンラインショップ」またはお電話で
<https://www.kogensha.jp/shop/>
TEL 03-3460-0429（平日10:00～17:30）

